
魔法少女リリカルなのはStrikerS ~ 二次創作 ~

4m

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikerS（二次創作）

【コード】

N9096Y

【作者名】

4m

【あらすじ】

二次創作です

苦手な方はご注意ください

オリジナルの主人公が、訳の分からない世界に来てしまい、戻ろうとあたふたする作品です

文章力はあまり期待しないでください・・・

いま、普段の生活

「でさー、こいつがさー」

「はいはいわかったわかった」

いつもと同じ毎日

いつもと同じように学校に行くと、休み時間は大体こいつはこの話だ

「いやさー？CD買おうか迷ってたんだよね」

「・・・買えばいいんじゃない？」

いつも半分呆れたように俺は答える

最近こいつは気になっているCDを買おうかどうか迷ってるらしい

その理由が・・・

「だってさー、タイトルに少女って入ると変な目で見られそうだし」

「好きならいいじゃん、買っちまえよー」

こいつ曰く、登場キャラは皆大人だけどタイトルに少女がつくから
決心が・・・だそうだ

「んじゃ、チャイム鳴るからもう行くわ」

そう言って自分の席にもどろろとすると呼び止められた

「これお前にやるよ」

そう言って差し出してきたのは『ストライカーズ』と書かれた単行
本だった

「今出すなよバカ！」

そう、ここは学校

ということとは他にも生徒がいるわけで、幸いにもバレなかったが危ないところだった

なぜ？知らないところへ（前書き）

投稿のしかたを少し間違ってしまいました

なぜ？知らないところへ

「んじゃ、チャイム鳴るからもう行くわ」

「あ、ちょっと待った」

自分の席に戻ろうと歩き出そうとしたときにふと呼び止められた

「これ、やるよ」

目を戻した時に飛び込んできたのはサブタイトルが『ストライカーズ』と書かれたこいつの本だった

しかもまだ未開封、新品同様だ

「ちょ！お前何やってんの！？」

そう、ここは学校

ということとは他の生徒もいるわけだが幸いにも俺が素早く取り服の下に隠したため騒がれずにすんだ

「まったくお前は・・・」

「悪い悪い、それを特典目当てに二冊買ったから一つお前にやるよ」

「そっさいじつとね・・・」

まったく、ヒヤヒヤさせるぜ・・・

そうして俺は、服の下に本を隠しつつ自分の席に戻るこことなった

「家」

「ただいまー・・・つつても誰もいないか」

俺は一人暮らし

最初は戸惑ったけど慣れればもう住めば都、いろいろと便利なものである

居間の扉を開け中に入る

「よっころしょっと・・・」

俺は部屋の中央に配置してあるソファーへと腰をおろす

「進路ねえ・・・」

目の前のミニテーブルには、いろいろな大学や専門学校から送られてくる資料やパンフレット

俺ももう高校三年生

なのにまだ進路ははっきりしていない

決められないのだ

「まったく・・・」

そう言いつつも俺はカバンを漁った

すると

「・・・ん？」

何やら、教科書よりも小さな本を見つけた

「ああ、あいつのか……」

それは今日あいつから貰った単行本

教科書に挟まれていたとはいえ、ビニールが剥がれるといったことはなかった

「ふーん……」

俺はビニールを開け中をペラペラとめくった

「なるほどなるほど、魔法ね」

どうやら内容は魔法使いものようだ

最後までページをめくると

「うん？」

何やら小さな紙が落ちてきた

「なんだこれ？」

見てみると大きさは飛行機のチケットくらい

色は珍しく金色で、動かしてみるとキラキラ輝いている

「なるほど、ファンアイテムってやつか？」

それなら納得がいく

だけど俺は、あいつのおかげで内容はところどころ知ってはいるがファンという程でもない

それなら宝の持ち腐れだ

「・・・捨てとくか」

でもこの本はもう俺のもの、もしかしたらよく単行本に入っているあの紙のようなものなのかもしれない

俺は居間の扉のすぐ下にあるゴミ箱へそのチケットのようなものを丸めて投げた

扉に跳ね返りゴミ箱に入ると思ったが床に落ちてしまった

「まったく・・・」

この手の方法は取りにくいのが面倒である

何回やっても上手くないかない

何かコツがあるんだろうか？

「ん？」

しぶしぶチケットを拾いゴミ箱に捨てようとしたら、扉の向こうからなにやら光が漏れているのが見えた

電気なんかつけたらどうか？

俺はチケットを手に、光の正体を確認するため扉を開け廊下に出た

そして

落ちた

どこだ？見知らぬ街へ（前書き）

ごめんなさい

内容はうる覚えなので間違っていることがあるかと思えます

どこだ？見知らぬ街へ

く???)

「痛い・・・いってー！」

木箱を破壊し、木箱の周りにある小物も派手に飛び散らしながら俺は荒々しく着地した

いや、落ちてきたと言ったほうが正しいだろう

「いってー・・・う・・・うどどだよ」

そこは薄暗い、どこかの街の裏路地だった

人の気配がまったくしない

物が散乱しているだけだ

「と……とりあえずどこかに連絡を……」

俺はジープンのポケットに手を入れ携帯を取り出した

ん？まて……ジープン？

俺は学生服で学校に行つたはずだ

帰ってからも着替えていない

なのになぜ？

よく見ると上着も違つようだ

ここだと暗くてよく見えない

「くそ、明かりはどこだ……？」

周りを見渡してみても照らすようなものはない

不幸なことに俺の携帯にはライト機能がない、待ち受けの明かりでは少々無理がある

それに圏外ときたもんだ

「・・・たく、どうしろってんだよ・・・」

まだ何かないか辺りを見回すと

「あれは・・・いって・・・大通り？」

痛む体を無理やり起こしその方向に目をやると、昏間なのだろうか

見た感じ大きな路地からは街灯とは思えない明かりが感じられた

「とりあえず・・・行ってみるしかない・・・」

行動しなければ何も変わらない、そう自分に言い聞かせ俺は歩き出した

「ほんとに何処なんだ？ここ・・・」

俺が暮らしてた街とはまるで違う、見たこともないところだった

それに俺の格好

下はジーパン、上は裏地が赤で表が黒のコート

インナーに白いシャツを着ている

「なんだよ、なんなんだ！」

気がつけば俺は走りだしていた。すべてが夢だと信じたい、そんな
思いで走っていた

だけどこうなってしまうた以上仕方ない

「そつだよ・・・まずは情報だ」

何事にも情報は不可欠だ

それに走ったおかげで通りにある本屋を見つけることができた

これはもう入って調べるしかない

〈本屋〉

「まったく読めねえ・・・」

入って俺は雑誌コーナーに入った

下手に新聞を読むより、雑誌のほづがわかりやすい

これが俺の考えだ

この世界でもそれは共通だと思い雑誌コーナーに足を向けた

そして金髪美女が表紙の雑誌を手に取りペラペラページをめくった
まではよかった

よかった・・・のだが

まったく読めないのだ

英語に似ている・・・だが読めないのだ

というかこんな文字の羅列は見たことがない

「どつしたもんかなあ・・・」

半分呆れたように腰に手をあてた

するじ

「・・・ん？」

何やら・・・カチカチと鉄を触っているかのような感覚があった

なんだなんだとそれをホルスターのようなものから取り出してみた

「な・・・！」

俺は叫びそうになったがここは本屋。一般の人もいるわけだ。下手に叫べば注目を集めてしまう。それに今注目されたら大変なことになる

なんで俺は銃なんか持ってんだ？

それも黒塗りのハンドガン

こんな物騒なものを普段から持ち歩くことはない

落ちてきたことと何か関係が・・・？

「ひ……!」

ふと、隣から女の人の声が聞こえた

雑誌を持ったままびくびく震え、その目は俺が持っているハンドガンに向けられている

「ええと……これはその……」

だが、弁解してももう遅かった

「キヤアアアー!」

耳をつらぬくような悲鳴

俺はハンドガンホルスターにしまい雑誌を戻すと一目散に本屋をあとにした

弁解せず逃げなければ確実に警察に捕まってしまうていただろう

〜どこかの公園〜

「はあ・・・はあ・・・」

一目散に逃げた結果俺はある公園にたどり着いた

息を整えるためベンチに座る

「もう・・・いったい・・・なんなんだ・・・」

心身共に疲れはて、俺は泣きそうになっていた

変なところに飛ばされるは、服装は変わってるわ、文字は読めないわ、ハンドガンはあるわ、叫べられるわ・・・もう疲れてしまった

「はぁ・・・どうしよう・・・」

頭に手を当て悩んでいると

いきなり周りが歪んだ気がした

「今度は何だよー!!」

俺はもう切れる寸前だった。それに加えて変な歪み。もう何が合っても驚かない

「なんだよ・・・これ・・・」

前言撤回、驚くようなことが起きた

歪みが収まったと思ったなら辺りの風景が気持ち悪いものに変化した

普通の公園が、原型がないまでに

地面の色は赤茶け、公園に生えている木からは赤黒い液体が流れている

「……」

思わず吐き気がした

そりゃそうだ、こんな気持ち悪いもの見たことがない

「グワアアアアー!!」

そんな俺の前に獣のような声をした化けものが生えてきた

そう・・・生えてきたのだ地面から

しかも・・・五体

人形だが足は機械、全身白に赤い線といった鎧のようなもので包まれており、右腕部分にはバカでかい中華包丁のようなものが生えている

俺は本能的に感じとった

もうダメだ・・・と

その中の一体が俺に飛びかかってきた

おそらく一体を突撃させ俺の出方をみるのだろう

もう終わりだ・・・

目を閉じる気力すらない

死ぬ・・・と思ったその時、俺の両手が自然に腰にあるホルスターに回されハンドガンを手に取り相手に向けた

それも・・・二丁

片方は先ほどの黒塗りのハンドガン、もう片方は左のホルスターにあった白塗りのハンドガンだった

さっきは右手を腰に回したため左のには気づかなかったのだ

そして銃を構えると、マシンガン顔負けの連射力でその一体を蜂の巣にした

もうそれは動かない

「え・・・？え？」

俺もわけがわからない

なんでこんなことができる？

すると今度は残り四体が一斉にかかってきた

これには俺も手を顔の前でクロスさせ衝撃に備えた

だが次の瞬間俺は銃を素早くホルスターに戻すと、手に剣を出現させ向かってきた四体に横殴りするように切り抜いた

四体はまとめてぶっ飛び地面に打ち付けられた

「なんだ・・・？」

どこからか出現した銀色の剣。日本刀ではなく両刃タイプだった

これを振り抜いたわけだ

「これ・・・どこかで見たような・・・」

必死に考えようとするが今はそれどころではない

四体は起き上がりまた一斉にかかってきた

今度はタイミングをずらし一体が前に、三体がその後ろから襲いかかってきた

「うわ！」

今度こそ終わった・・・そう思ったのだが

頭に浮かんでくる様々な戦術

ここはこう切ればいい、次にハンドガンで撃ち、剣に持ちかえ吹き飛ばすというようなものが沢山浮かんできた

「う・・・うおー！」

俺はまず向かってくる一体を剣ではるか上空に切り上げ、後ろからくる三体を剣が鎌に変化したので横殴りに切り裂いた

次に、切り上げた一体が落ちてきたのでまた二丁拳銃を取り出し蜂の巣にした

落ちてくる一体の残骸

三体も真っ二つにされ動かない

新たにこいつらがでてくることもないようだ

でも、次に問題なのはこの空間

どうやって元に戻るのだろう

「ん？」

空を見てみると、何やらコウモリのようなものがパタパタと飛んでいた

すると、まとも自然に手が動きそのコウモリを銃で撃ち抜いた

撃ち抜いた瞬間周りの空間が歪み、元の公園に戻った

「何なんだよくそ！何なんだ！」

違う世界、歪む空間、戦術、服装、襲いかかってきた敵

考えるだけで頭がパンクしそうだった

「うっうっうっ」

いつの間にか俺はしゃがみこんでいた

目の前が・・・チカチカ・・・

「ちょっと君！？大丈夫！？しっかりして！」

どこからか声が聞こえる・・・

ゆっくり顔を上げると俺と同じくらいの女性が駆け寄ってきていた

だがそこまでしか覚えていない

俺の意識は、そこで途絶えた

いざ！機動六課へ（前書き）

もう一人オリジナルキャラクターの登場です

苦手な方はご注意ください

いざ！機動六課へ

「うーん・・・」

長い眠りから覚めたように、目を覚ました

意識がなくなってからどれだけ時間が経ったか・・・

いや、それよりもここは何処だ？

なんだかこの質問もデジャヴに感じる

とにかく、目の前に広がっているのは空でもなく公園の風景でもない、どこかの一室の天井だった

俺はソファーに横になっており毛布がかけられている

「あ、よかった！気がついた！」

上半身を起こし辺りを見回し最初に飛び込んできたのは、キッチンらしきところで作業している俺と同じくらいの女性、黒髪のロングで顔立ちが整っているとても綺麗な女性の姿と安堵の言葉だった

「はいお水、よっぽど疲れてたんだね。三時間くらい眠ってたよ？」

「ありがとうございます」

俺は素直に水を受け取りそれを飲んだ

ずっと何も、水すら口にせず走り回っていたのでいつもよりもずいぶん美味しく感じられた

「さて、聞きたいことが山ほどあるんだけどいいかな？」

女性は俺の元に近寄りそう言った

「あ・・・はい」

俺は水が入ったコップを目の前のテーブルに置き、女性の質問に従うことにした

「じゃあまず、君はなんで公園で倒れていたのかな？」

「えっと・・・それはその・・・」

いきなり違う世界にやってきて、色々探しまわりながら走りまわったあげく公園で変な奴らを倒したのはいいがショックなことがあるすぎてぶっ倒れましたなんて言えるわけがない

「友達を・・・探して走り回っていたらいきなり目の前がチカチカしたんです・・・」

嘘

全くもって嘘である

とっさに考えて出てきたものだがこれ程ひどいものはないだろう

「……嘘だね？」

やっぱりバレてしまった

これでバレないほうがおかしい

「……すいません」

「いいのいいの気にしないで、いきなり初対面の人に話せて言われても無理だよな」

すると女性は懐からカードのようなものを取り出し、俺に見せた

「私はシャモニー、シャモニー・ガライヤ。皆からはシャムって呼ばれてる。あ、皆っていうのは私の仕事場の人たち。ほら、ここに書いてある『機動六課』ってとこ」

そう言っつてシャモニーさんは単語を指差す

だがいかんせん俺はこちらの文字が読めないのだ

指差さされてもさっぱりわからない

思わず首を傾げてしまう

「あれ？もしかして文字が読めない？」

そんな俺の様子に気づいたのが、シャモニーさんはそう言っつてきた

「じゃは……もしかして……」

シャモニーさんは考えこんでしまった

この文字はそんなに有名なものなのだろうか？

俺が知らないだけ？

「えっと……君はミッドのどっから辺に住んでるの？」

「ミッド……？ミッドってどこですか？新しい地名ですか？」

俺のこの言葉にシャモニーさんは一瞬驚いた表情をして、次にさっきとはまるで違つとても真面目な表情で俺の両肩に手を置き慎重に話し始めた

「いい？気をしっかりもって聞いてね……？」

「あ、はい……」

そんなシャモニーさんに何も言えず、次の言葉を待った

「君は・・・次元漂流者なんだ」

聞き慣れない言葉だった

じげんひょつりゅうしゃ？

「えっと・・・説明すると、何らかの影響で自分が元いた世界から別の世界に飛ばされちゃった人のことをいうんだ・・・」

俺は何も言葉が出なかった

なるほど、それなら納得がいく

この不思議な世界も、現実離れた現象も、何もかも

俺は恐怖した

もう元の生活・・・世界か、には戻れないんじゃないか・・・

家はどつする？

家族は？友達は？将来は？

もう会うことも、顔を見ることも、話すことすらも出来ないんじゃないだろうか？

そう思うと震えが止まらない

「大丈夫！落ち着いて！まだ帰る方法が無いって決まったわけじゃない！」

「・・・へ？」

まだ可能性は残っている、この言葉に今ほど感謝したことはないだろう

「私達、機動六課の仕事にはそういう人たちをちゃんと元の世界に戻してあげるっていうの含まれてるんだ。時間は掛かるかもしれないけど見つかるまで絶対諦めないから！」

そう意気込むシャモニーさんはとても頼もしく思えた

「だから文字が読めないのか・・・やっと辻褄が合いました」

そんなシャモニーさんに安心したのか、俺は自然と口が開いた

シャモニーさんは、俺が普通に話し始めたことに安心したのか優しい表情に戻った

先ほどの絶望感も消えて、今は希望があった

「よかったー、あのままおかしくなっちゃうのかと思ったよ」

「シャモニーさんのおかげです」

たしかに、あのまま行ったら俺は確実におかしくなっていた

運よく俺を助けてくれたのがシャモニーさんだったのが救いだっ

「あ、そうだ。ごめんね・・・君が持っていたもの調べさせてもら
ったんだ」

するとシャモニーさんは俺の持ち物である複数の物を持ってきてテ
ーブルの上に広げた

携帯電話、多機能型音楽プレイヤー、そして

「これが一番気になったんだけど・・・」

シャモニーさんが持っていたのは二つの銃がしまえるガンホルスター

もちろんあの白と黒の銃も収まっている

「あ！それは・・・！」

「なんでモデルガンなんて持ってるの？間違えれば逮捕されるよ？」

「・・・はい？」

なんだか違うような気がする

たしかにさっきはこの銃で弾丸を撃ちまくっていた

するとシャモニーさんはホルスターから二丁拳銃を取り出し引き金を引いた

止めかけたが、なんとカチカチ音がするだけで何もでない

あれ・・・？

「もう・・・今回は私だったからよかったけど、一歩間違えばどうなっていたか・・・」

シャモニーさんは銃をホルスターにしまい差し出してきた

俺はそれを無言で受けとる

なんで弾が出ないんだ？

「それじゃあ、君がこっちの世界に飛んできたときのことを教えてね？何か怪しいものを持ったり触ったりしなかった？」

「怪しいもの・・・」

俺は必死に考えた、怪しいもの・・・怪しいもの・・・

そして俺は答えにたどり着いた

来たときに持っていて、今は持っていないもの・・・

あわててテーブルの上にあるものを確認したが、それが無い

「シャモニーさん！これの他にありませんでしたか！？俺の持ち物
！」

「う・・・うん。それ以外には特に無かったけど・・・」

いきなり大声で尋ねた俺にシャモニーさんは驚きながら答えた

ここに無いとしたらあそこしか考えられない

時刻は夕暮れ

暗くなれば探しにくくなる

明日になれば誰かに気づかれるかもしれない

「あ、ちよつと！君！」

俺は考えるより先に部屋を飛び出していた

～裏路地～

シャモニーさんの住んでいたマンションを出て、俺は一目散に最初の裏路地に来た

「チケツト・・・チケツト・・・どこだ！」

必死に辺りの物を投げ飛ばし金色の紙を探す

まだここにあればいいが……

「はぁ……はぁ……何でこんなところに？」

「ここにあるんです！俺のもう一つの持ち物が！」

必死に辺りを探す

手が傷つくのも気にしない

永遠に戻れないよりマシだ

「どこだ……どこだ……あつたー！！」

そして見つけた、木箱の残骸の下敷きになっていたクシャクシャに丸めた金色の紙を

「やつ・・・た」

「ちょっと君！君ー！」

また意識が途絶えた

気がつくと、俺はシャモニーさんに肩を貸されて来た道に戻っていた

「よかった気がついた！ダメだよー、病み上がりなのに無理したら」

「すみません・・・」

俺のポケットにはしっかりとあのチケットが入っていた

これがたった一つの手がかりだった

それからしばらく夕日に照らされた道を歩いていると、シャモニーさんが口を開いた

「明日、機動六課に行くからね？」

「はい？なんでです？」

「次元漂流者の引き取りには、きちんとした書類と保証人が必要なんだ」

たしかに、そうしないと次元漂流者とやらがどこで何をしているかわからないな

ってちょっと待て

「引き取るって・・・誰がですか？」

「うん？私だよ？」

「瞬間が何だかわからなかった」

「引き取る？シャモニーさんが？何で？」

「理由はね、何だかこれからのあなたのことが心配で放っておけなくなっただの、一人で暮らすにしても文字とか読めないでしょ？」

「凶星だ」

「ここで生きていくには情報が足りなすぎる」

「文字が読めないなんて話にならない」

「・・・でも、迷惑とかかけちゃうかもしれないし、お金とか・・・」

「心配しないで、私は結構お金持ちなのだ!」

そう言って胸をはるシャモニーさん

シャモニーさんが言うには、機動六課というところはとにかく仕事
がハードで今日みたいに休暇がなかなかとれないので、使わないと
いうか使えない給料がどんどん貯まっていくのだという

それに加え、命をかけた仕事なので給料がとてもいい

なので今さら家に人が増えたところで特に変わらないという

でも、それでも住まわせてもらっただけというのはなんだか気がひける

しかも女性にだ

だから何か仕事をしようと思ひシャモニーさんに提案した

「な・・・なら、シャモニーさんがいない間、家の家事炊事は俺が

します！」

これが俺にできる最低限のこと

一人暮らしたたので慣れている

「よし！これで交渉成立だね！」

そう言ってVサインを返してくれたシャモニーさん

「あ、それと・・・私のことはシヤムでいいよ」

「でも、それはさすがにシャモニーさん・・・」

「シヤム」

「いや、ですから・・・」

「シャム」

「シャモニーさん・・・」

「シャム」

「シ・・・シャムさん」

「シャム」

「・・・シャム」

「よるしに..」

そんなやり取りをしている間にいつの間にかマンションに着いていた

たしかにあの部屋は女性の一人暮らしには広すぎる

ルームメイトが欲しかったのかな？

というか、冷静に考えてみたら女性と二人って・・・

しかもとっても綺麗な人と・・・

なんか・・・緊張してきた

「どうしたの？」

「な・・・なんでもないっす！」

そういえば、あの歪む空間のこと話しそびれた

いいか・・・今は余計な心配はかけたくない

「そういえば、君の名前は？」

マンションのエレベーターに乗り込むとシャモニーさ・・・シャムがそう聞いてきた

そういえば名乗ってなかったなあ

「俺の・・・名前は・・・」

そこで俺は思い出した

俺と同じような服を着て、俺と同じような銃を両手に持ち、銀色に光る剣を背負って戦う男の名前を

ここで本名を言うのはまずい

そう思い俺はその男の名前を言うことにした

「・・・ダンテ」

「うん？」

「俺の名前は、ダンテだ」

「そうか・・・これからよろしくね、ダンテ」

本物のダンテのように上手くはいかないけど、俺なりに頑張ってみようと思う

これから新しい生活が始まる

不安と安心が俺を支配していた

潜入！機動六課（前書き）

オリジナルの展開が入ります

苦手な方はご注意を

潜入！機動六課

『今日一番悪い運勢は・・・ごめんなさい 座のあなたでした』

「こつちでも朝の占いってやってんだね」

「ダンの世界でも？」

「うん、まあね・・・っていうか本当にそのあだ名になったんですねシャモニーさん」

「ダーニー？シャムって呼んでって言ったよね？あと敬語も」

「ごめん、シャム」

朝、シャム・・・の話によるとシャムの機動六課への出勤時間はとても早いらしい

シャムが先に行き、俺が後で一人機動六課を訪れるということもできるが、地理がわからないので却下

それならば一緒に行こうという話になり早起きして朝食を食べているわけだ

「私は書類を取りに行くからその間・・・そうだ、食堂で待っててね。その方がわかりやすいから」

あのゲームが出来るデバイスもあるでしょ？とシャムは最後に付け加えた

昨日の夜、俺が持っていた多機能型音楽プレイヤーにシャムが興味を持ったので触らせてあげたところ予想以上にハマっていた

俺のハイスコアを一時間で塗り替えされるくらいだ

そのときに、私もシャムって呼ばれてるんだから、私もダンって呼んでいい？と言っていたので、なんだかくすぐったかったがオーケーした

それほどまでにフレンドリーなシャムが俺の世界について詳しく聞いてこないのは、まだこの現実を受け入れきれていないんじゃないかというシャムの優しさだろう

その優しさに、俺はもの凄く感謝してる

『そんなあなたに今日のアドバイスー！それは・・・ズボンにあるポケットに連絡用のデバイスを入れるです！思わぬ人から連絡が来るかもしれませんよー？』

「っていつか俺何気に最下位だなー・・・」

「ダンって 座なんだねー」

いつも最後にやっているアドバイスとやらを実行したことはないが、こんな世界に来てしまったのだ少しは運に頼ってもいいだろう

「あつ、実行するんだ」

「まあ・・・たまにはいいかなってね」

「可愛いところあるんだね」

俺が自分の太もも辺りにあるポケットを見つけ、携帯を入れる仕草にクスクス笑うシャム

その仕草がとても命の現場で働いているとは思えないほどに可愛らしかった

「何？」

「いいや、なんでも。ごちそうさまでした」

その事を悟られないように俺は食器を片付けにキッチンへ行った

ちなみに今日の朝ごはんはシャムの手料理だった

さすが一人で広い部屋に住んでいるためかとても美味しく頂くことができた

ただただ感動するばかりである

「じゃあ、そろそろ時間だから行くよ？用意できたら言っただけ？」

「はい、わかったよー」

俺は昨日与えて貰った部屋に行くと必要な物を準備した

携帯は持った、シャムが言っていた音楽プレイヤーに、一応何かあった時のためにガンホルスターを腰に巻いた

コートで隠れるため普通は見えない

だがシャムが言う『機動六課』で何かあるかわからない。護身用に持つことにした

「ごめんごめん、待たせたね」

部屋から出るとシヤムが扉の前で待っていた

指で何かの鍵をくるくる回しながら

「えっと・・・シヤム、この部屋ってカードキーじゃなかったっけ？」

「え？・・・ああこれ？これは車の鍵だよ？」

・・・車？

「シヤムって・・・車運転出来んの！？」

「うん、そんなに驚くことかな？」

実際、俺の世界で車に人を乗せて怖がらずに運転できるのはだいたい二十歳を越えてからだ

でもシャムは見た目俺と同じ年のようなもの

俺より一つ上だったけど

どれだけ車に乗り慣れてるんだ？

「まあとりあえず行くよー」

シャムのことだ、乗り慣れてるんだからきつと安全運転だろう

そう思い俺はシャムの車がある駐車場へと向かった

〈機動六課駐車場〉

「着いたよー、ダン？」

「う・・・うお・・・」

前言撤回、なんなんだこのドライビングテクニックは・・・

並みの人間じゃあんなスピードは出せないぞ？

それにこの車

明らかにスポーツカーじゃないか！

もはや何でもありなのかこの世界は！

「ダン？鍵閉めちゃうよー？早く降りてー？」

「・・・はいはい」

なんだか今日の占い、当たってる気がする

〈食堂〉

「じゃあここで待っててね？結構時間かかるからその間に朝ごはん食べに他の職員が来るかもしれないけど怖がらなくて大丈夫だよ、皆いい人たちだから。美人さんも沢山いるよー？」

「・・・はあ」

俺が案内されたのは二人用の席

向かいには多人数用の席がある

ここが人でうまるわけだ

たしかに美味しそうな匂いがする

「はいこれ、私からの奢り。喉渴いたら飲んでね」

そう言って渡されたのは缶ジュースだった

名前は読めないが美味しそうだった

「それじゃねー」

缶ジュースを渡すとシャムは食堂の出口へ歩いて行ってしまった

結構心細かったが仕方がない

「わっ……と」

俺は音楽プレイヤーを取り出して時間を潰すことにした

どれほど時間が経っただろうか

シヤムの言った通り人がだんだんと食堂に集まってきた

最初は皆俺のほうを見るが、たぶん誰かの知り合いだろうと解釈してすぐに目を反らす

初めは俺も戸惑ったが慣れれば気にならなくなった

早くシヤム来ないかなあ・・・

「いや〜お腹空いたよティア〜」

「わかったわかった」

「スバルさん凄いですよねー」

「キョクルー」

出入口に目をやると、朝練でもしたのだろうか？

妙に疲れきった三人の女の子と一人の男の子と小さなドラゴン（ドラゴン！？）が入ってきた

それも男の子と一人の女の子はまだ十歳くらい

なるほど・・・俺と同じく誰かについてきたってわけか

「キャラもエリオも結構動けるようになっただね」

前言撤回、もはやこの世界は何でもありなようです

その後四人は自分たちの朝ごはんを受け取り多人数の席に座った

一人がもの凄い量を受け取っていたがあんなに食べられるのだろうか？

四人は食べ始めるかと思いきや誰かを待っているようだ

席を見るとまだ六人分くらい空いている

一緒に食べる相手がまだ来ていないのだろう

「仲がいいんだなあ・・・」

俺も昼休みにはよく友達と食べたもんだ

そう思い出に浸りながら缶ジュースを飲むとすると

「あちゃー、全部飲んじゃったか・・・」

もうすでに中身は空っぽだった

空の缶ジュースに用はない

俺はゴミ箱を探したが何処にあるかわからない

下手に動けば注目されるだろう

「どつしたもんかな・・・」

考えている最中、缶を持って歩いている職員が目に入った

その職員は四人が座っている席から2〜3メートル離れたところにあるゴミ箱らしき箱にその缶を捨てた

あそこがゴミ箱なわけか

だが捨てに行こうにも下手に動けない

どうしようかと、何気なくその職員を目で追っている四人の座っていた席がうまっっているのに気がついた

缶を捨てているところを見ているうちに残りのメンバーが来たのだ
ろう

一人はピンク色の髪をした長いポニーテールの美人さん、一人は長い金髪の美人さん、一人は長い栗色の髪の美人さん、一人は、茶髪のショートヘアの美人さん、そして最後の一人は髪を編んでいる背が低い可愛らしい子

いやたぶんその髪を編んでいる子は大人だと思う、背が低いだけで

それにあの金髪美人さん何処かみたような・・・

考えこんでしまいそうだったので俺はとりあえず缶を捨てる方法を
考えた

そして浮かんだ

ここを動かさず缶をすてる方法

チケットと同じだ

ここから投げて入れればいい

なんだか今日は出来そうない気がする

アドバイスも実行したことだし

ただどこからゴミ箱まで15メートルは離れている

教室の黒板から後ろの壁にあるゴミ箱に投げるより難しいと思う、
だが注目をなるべく受けずに捨てるにはこれしかないっばい

なんだか本当に出来そうない気がするのだ

そして投げるモーションに入ろうとしたその時

ふと、多人数の席に座っているあの10歳くらいのピンクの髪の女

の子と目があった

俺の姿をみたその女の子は、一体これから何をやるんだろっ?といったような目でこちらを見ていた

どうやら目を反らしてはくれないようだ

俺は決心して、ゴミ箱に狙いを定め缶を放り投げた

缶はきれいな放物線を描きながら、吸い込まれるように見事ゴミ箱に入った

ピンク色の髪の少女に恐る恐るガッツポーズをすると、少女は満面の笑みで俺に向かって拍手をしていた

そんな少女の行動になんだなんだと同じ席に座っていたメンバーたちが問うと、少女は放物線のジェスチャーを交えながら俺がやっていたことを説明していた

説明が終わるとその席に座っていた他のメンバー全員が俺に目を向けた

10歳くらいの男の子と大食い少女はキラキラした目で、オレンジ色の髪の少女と金髪美人と栗色の髪の美人と茶髪のショートヘアは何やら考えるような目で、ピンク色のポニーテールと髪を編んでいる少女？は俺を探るような目で

慌てて俺は目を反らした

もしかして、結構目立ったことをしてしまったのではないだろうか？

「ダン？どうしたの？」

シャムー！！

これで二度目だけど今ほど感謝したことはない！

目の前には、書類を両手で抱え不思議そうに俺を覗きこむシャムがいた

シャムは俺の向かい側にある椅子に座り、テーブルの上に書類を広げた

一方俺は、あの集団がなんとなく気になりちらちら見ていた

あちらもすでに目を反らしているが俺のことが気になるのだろう

同じようにちらちらと俺を見ている

ピンク色のポニーテールの方はずっと俺を睨んでいるが

そんな俺が気になったのかシャムは、一体何をちらちら見ているんだろうと俺の目線の先にある人たちに目を向けた

80

「ああ、あの人たち？あの人たちはね、機動六課の最強部隊の人たちなんだ」

なるほど・・・

「えっと・・・書類のことここに名前書いてね？それで終わりだから、文字はこんな感じ」

と言ってシヤムは、おそろくこちらの文字でダンテと書いてあるであらう一枚の紙を渡してきた

あの人たちから目を反らし俺はそれを見ながら慣れない手つきで名前の欄に書いた

「よし、これでオツケー！これからよろしくね、ダン！」

その言葉に俺は笑顔で答えた

これから新しい生活が始まるのだ

「シヤム、少しいいか？」

俺がシヤムの言葉に答えたその時、隣から女性だがなんだか勇ましい声が聞こえてきた

「シ・・・シグナム副隊長！」

シラムは俺の隣にいてであろう女性に見事な敬礼をした

俺は恐る恐る隣に立っているであろう女性に目を向けた

そこには・・・さっきまで俺を睨んでいたピンク色のポニーテール
の人がいた

「ほう、お前は次元漂流者なのか」

「昨日、私が保護しました！」

なんで・・・なぜここにいるんだ？

あのテーブルのメンバーも皆こっち見てるし

「それとお前、ただ者ではないな？」

シヤムから俺に目を戻すと、ピンク色のポニーテールの人はそう言った

「な・・・なぜです？」

「目を見ればわかる、ただ者ではない」

たしかに俺は次元漂流者だけど、そういう意味ではないと思う

俺は女性の雰囲気にもできず、ただ座ることしかできなかった

「それで相談なのだが・・・」

そんな俺の状況などお構い無しに女性は信じられない言葉を口にした

「この後何もなければ・・・手合わせ願えないだろうか？」

俺は一瞬何がなんだかわからなかった

あのテーブルのメンバーも驚いた表情をしている

数人は、あちゃーという顔をしていた

「どつだ？」

どつだつて言われましてもねえ・・・

もしこのまま承諾してしまえば、確実に大変なことになってしまい
そんな気がする

何が何でも逃げなくては！

俺は何か逃げられる方法を探した

映画みたいにテーブルの下の相手に見えない位置に何かないかなど

そして俺は

太もものポケットにある携帯に気づいた

逃走！機動六課（前書き）

オリジナル設計が入ります

苦手な方はご注意ください

逃走！機動六課

これだ・・・これしかない

ポケットに入っている携帯がキーだ

幸いにも携帯があることはバレていない

この携帯を何とか利用し、この状況から脱出出来ないだろうか・・・

「やはり、何か用事があるのか？」

「いや・・・なんというかですね・・・」

落ち着け・・・まずは状況の整理だ

何らかの方法で携帯を利用してこの人たちを振り切り、無事に機動六課の正面玄関までたどり着き、シャムの家まで逃走する

だが携帯をどう使う？

折り畳み式なので開けたら音ですぐにバレル

閉じたまま使える機能といたら、

カメラのシャッター

ボタン長押しによるマナーモードと通常モードの切り替え

デジタル時計の文字の切り替えくらいだ

長押しボタンは短く押すと、通常モードなら電信音が鳴り、マナーモードならバイブレーションが機動する

うん？待てよ・・・

もしかしてこれを利用すれば・・・

よし、あとは演技力しただい！

俺は恐る恐る話しかけた

「あの、実は・・・」

そこで俺は携帯のボタンを押した

ピピピピピピピピピピ

着信音に聞こえるように一定の間隔で

「あ、出てもいいですか？」

「ああ、かまわない」

俺は携帯を取り出し電話をするフリをした

俺の携帯がそんなに珍しいのか、あのテーブルのメンバーは俺が使っている携帯を見ている

「すみません・・・ちょっと仕事っていつか用事ができちゃいまして・・・なあシャム？」

「あ・・・そ・・・そうです！ほらダン、早く行かないと！」

「それは・・・残念だな、手合わせ出来るかと思ったのだが・・・」

「まあまあシグナム、諦めろって」

「そうやでシグナム、ごめんなーうちのシグナムが」

俺たちのことを見かねたのか、髪を編んでいる少女？と茶髪のシヨートヘアの美人さんが歩いてきた

「いえいえ！それでは失礼します！」

俺はこの演技がバレル前に一目散に玄関まで走り始めた

どれぐらいもつだろうか？

「あいつもいろいろ忙しいんだな、また今度か」

「あれ？でもあいつって次元漂流者じゃなかったっけ？」

「昨日保護したってさっき聞いたな、どういうことや？シャム」

「あの・・・すみません・・・」

「ってことは・・・」

「「逃げたー!!」」

「はあ・・・はあ・・・」

俺は機動六課の廊下を無我夢中で走っていた

「さすがにもう・・・気づかれたか？」

あんな子供だましの方法じゃ一時しのぎがやっただ

ってそんなこと考えてる場合ではない

一刻も早く正面玄関に行かなきゃいけない

)

突然俺の携帯が鳴り出した

さっきのようなボタンの音ではない、本当の着信音だ

だがそんなバカな・・・圏外だったはずだ

怖かったが、俺は電話にでることにした

『あ、ダン！よかった繋がった！』

「シャム!?!」

なんと、電話の相手はシャムだった

だけどなぜ？

『同僚に頼んでダンのデバイスに通信を繋げられるようにしてもらったの！』

この世界の技術はすごいな、ってだからそんなこと言ってる場合じゃない！

「シヤム、今・・・どうなってる？」

『もう大変だよー！あの後最強部隊の人たちが六課の中を駆け回って血眼になってダンのこと探してるよ。特に・・・シグナム副隊長が』

これはなんとしても逃げなくては

捕まったらどうなるかわからないな

『とにかく頑張っつて逃げて！私もなんとか・・・シヤム？何やっつと

るんや？・・・わ！やが』

俺はそこで携帯を切った

回線を辿られて居場所がバレたら元も子もない

「はあ・・・ん？」

よく見たら目の前に朝入ってきた正面玄関があるではないか

「助かったー・・・」

まずは無事正面玄関に着いたことに感動だ

だがよく見てみると、扉のすぐ側に小さな女の子が立っていた

年齢的にはあのピンク色の髪の少女と同じくらい

だが髪の毛が長く、色は青っぽい白のような感じだ

顔は帽子を被っていて目元が見えない

ほんとに何でもありだなと思いつつながら横を通り過ぎようとするとき、その女の子が声をかけてきた

「すみません、今この玄関は物資運搬に使用するので、出入口は訓練場のお使いくださいです」

そう言つとペコッと頭をさげた

「あ、わかりました」

それは仕方ない

こっちは逃げるといふ名目で使おうとしていたのだからそっちが先だ

〈訓練場〉

「出口……出口……あった！」

これでやっと機動六課を出られる

そう思った時だった

「なんだなんだ!？」

突如、その訓練場が変化した

そう、『変化』したのだ。文字通り

ホログラムの一種か？

近未来の映画のように、ビルや道路が復元されたかのように現れたその様子は、その場の空気感まで再現しているほどだ

「・・・もう何も言えない」

感動していたのも束の間

「うお！？」

俺はとっさの判断でかわした

飛んできたのは弾丸のようなもの

一歩間違えば死んでたんじゃないか！？

そう思いながら弾丸が飛んできた方向を見ると

「……ロボット？」

空中には何やらロボットのようなものが浮いていた

しかも一体ではない

十体くらいがズラッと浮いていた

「なんだありや……うお！」

考えてる暇もなくロボットは次の弾丸を打ち出してきた

「おいおいおい！」

俺は慌てて近くのビルの陰に隠れた

一体なんなんだ？

俺にどうしろっていうんだ？

ビルの陰からロボットを観察していると

何かがおかしい

相手は俺がビルの陰に隠れたのを見たはずだ

なのに追ってこない

まるで俺が出てくるのを待っているみたいだ

「……出てきて戦えってことか……」

しばらく考えてみた

あの女の子はこの訓練場の出口を使えと言っていた

そのためにはあのロボットを倒さなくてはいけない

「やるしかないか・・・」

俺は重い腰を上げビルの陰から出た

さてまずは状況判断だ

相手は十体

全員空中に浮いている

だとしたら・・・

俺はホルスターから二丁拳銃を取り出した

「よっしゃー！行くぜ！」

俺はまず駒のように回転しながら十体に向かって飛び上がった

十体は俺の行動に驚いたのか、四方八方バラバラに散らばった

だけど俺はそれを待っていた

腕を十字架のように広げ銃を構えると、バラバラに散らばった十体に弾丸を乱射した

自分でもビックリなほど正確に、その弾丸は十体を撃ち抜いた

だが一体がまだ倒れず地上で動いている

俺は剣を出現させた

すると、剣が禍々しい斧に変化

刃は血のように赤黒く、なんともいえない雰囲気だだけよっている

その斧を俺は空中で振りかざし、地上にいる一体に狙いを定めた

「よし・・・おりゃ！」

俺は地上にいる一体の頭上からその斧を叩きつけた

斧をふる力、そして落下のスピードが合わさったそのパワーは凄まじく、そのロボットを粉々に粉砕した

「これで・・・終わりか？」

敵が十体だけとは限らない、周りのどこかに潜んでいるかもしれない

ばか正直に全員出てくるということもないだろう

すると、陰でこっそり俺を狙っている一体を見つけた

全部で十一体だったのだ

「これを……えい！」

俺は斧を剣に戻し、その一体に向けて突きつけた

すると剣がワイヤーのように伸び相手を引き寄せたではないか

「なるほど……こつこつという使い方までできるんだなっ！」

引き寄せた敵にタイミングよく回し蹴りを放ち、壁に激突させた

もうそのロボットは動かない

この武器には色々な使い道があるようだ

「ええと・・・あった！」

ロボットを全部倒し終わった俺は出口を見つけた

空間を広げるには限界があるはずだ、そう思い探してみると運よく見つかった

「よっしゃー！って喜んでる場合じゃない！」

俺は一目散に機動六課の敷地を抜け、シャムのマンションまで走っていった

嫌だ！機動六課へ（前書き）

キャラの呼称が変わっている可能性があります

苦手な方はご注意ください

嫌だ！機動六課へ

「はぁ……ただいま……」

最強部隊、ロボットの追跡を振り切り、機動六課の敷地から逃走して二十分後

俺はなんとかシャムのマンションまでたどり着いた

一体何だったんだろう……

戦いを申し込まれたりロボットに殺されかけたり

機動六課ってどうなってるんだ？

「……腹減った」

気づけばもう昼頃

ということは午前中ずっと俺は追いかけてまわされたわけだ

・・・そついえば携帯が気になる

シヤムは電話が切れたあと何があったんだろう

俺は心配になり何か連絡の手段がないか模索していると

「ただい・・・まあ・・・」

玄関から聞き覚えのある声が聞こえてきた

「シヤム！」

俺はリビングを飛び出し慌てて玄関に向かった

もしかしたらシヤムもあの後何かされたかもしれない

「シヤム・・・はぁー、よかった・・・」

疲れて倒れてはいるものの怪我はしていないようだ

「ほら、肩貸して」

「ありがとう・・・ダン」

俺は倒れているシヤムを肩に担ぎリビンググへと向かった

あのまま倒れていたらお客さんにどう思われるかわからない

「「じゃあ・・・あの時と逆だね」

「いいからほら、座って・・・」

俺はシャムをソファアに座らせると、キッチンに行き水を一杯持ってきた

「あー、行きかえるー」

渡した水をシャムは一気に飲み干した

相当疲れていたのだろう

「で？何があったのさ」

「あ、そうだよ。ダンが六課から逃げたあとシグナム副隊長や八神部隊長とか最強部隊の人たちの質問にもみくちやにされて・・・大変だったんだよ・・・」

それは・・・悪いことをした

俺が目立つようなことをしたばかりに・・・

「あんな戦闘スタイルは見たことがないとか、就職先は決まってるのかとか・・・シグナム副隊長は、また連れてこい!・・・とか言ってたし・・・」

そりゃあ、あれだけ派手に暴れたら・・・ってちょっと待て

「もしかして、あのロボットってあの人たちが?」

「ロボット?そのロボットってこんな形してない?」

シヤムは手で縦長の楕円を描いた

確かそんな形をしていたはずだ

「信じたくなかったけど・・・やっぱりダンだったんだ!一体どういうこと!?!」

両肩に手を置き、前後に揺さぶりながらシヤムは聞いてきた

「とりあえず食堂から逃げた後のこと教えてよ。あの人たちが何したのか」

「いいよ、その後……」

――

「「逃げたー!」」

あわわバレちゃった!

そりゃそうだよね、あんな方法で出し抜けるわけないよね……

「私たちを出し抜くなんて……やるなあ、あの子」

「あいつ……フフ、なかなか面白いやつだ。これは何が何でも戦ってみたい!」

「だからシグナム・・・やめとけて」

どうしよう・・・大変なことになってるよ・・・

「はやて」

「はやてちゃん、どうするの？」

なんだかフェイト隊長や高町教導官も集まってきてさらに大変なことにー！

「うーん・・・シグナム、あの子の戦い方知りたくないか？」

「是非！」

これはまずい・・・そうだ！

「シャーリー！」

「うん？どつしたのシャム？」

私は偶然食堂にいたシャーリーに話しかけた

シャーリーならもしかして・・・！

「私の連絡用デバイス、今六課の中を走り回ってる少し違う電波と繋げられないかな？」

「まかせてー、ちよちよいと」

シャーリーはどこからか整備用の道具を取り出し、デバイスの改造を始めた

「ええか？リインが玄関に立つからその間に私たちは訓練場に行くんや」

「なるほど、誘い込ませてわけだね」

やばいやばい！

シャーリー、早くー！

「できたー！」

「ありがとうシャーリー！」

私は急いでダンに繋いだ

お願い！繋がって！

「あ、ダン！よかった繋がった！」

『シヤム！？』

なんとかダンに繋がった、あとでシャーリーに何か奢ってあげよう

『シヤム・・・今、どうなってる？』

「もう大変だよー！あの後最強部隊の人たちが機動六課の中を駆け回ってダンのこと血眼になって探してる。特に・・・シグナム副隊長が」

私はちらっとシグナム副隊長に目を向ける

「よし！テストロッサに続け！」

「だからよ・・・」

「よし、皆も行こうか？」

「『はい！是非！』」

「このまま捕まったら何されるかわからない！」

「とにかく頑張つて逃げて！私もなんとか・・・」

「シヤム？何やつとるんや？」

「わっ！八神部隊長！」

「こそこそ連絡をとっていたら八神部隊長にバレてしまった

おまけに驚いた拍子にダンとの通信が切れちゃった

「うーん？こんなときに誰と連絡とってるんや？」

「あ・・・えつと・・・」

「ちょっと見してみ」

八神部隊長は私はデバイスを取ると通話記録を調べた

「ほお、あの子の名前はダンテっていうんか」

「あわわ・・・」

「シヤムにもたーくさん質問したいことがあるんで、後で会議室な

」

キヤー！ダン！

絶対逃げてー！

「ほな、行こうか！」

そう言うと八神部隊長は私の襟を掴んで訓練場へ引きずっていった

「……よく生きてたね」

「私もその後の最強部隊の人たちからの質問攻めで死んだと思ったよ……」

シヤムによると余計なことは喋っていないようだ

そこはなんだか管理局員としての意地が働いたらしい

「それじゃ、次はダンについて教えて？」

「え？」

「なんであんな動きができるの？武器はどこから出したの？」

「・・・わかった、話すよ。自分でもよくわからないけど」

俺は、この力のことを話すことにした

あの歪んだ世界のことを除いて

「なるほどね・・・、こっちに来てから・・・」

「ああ、なんでだろうな・・・」

あいつに借りたゲームがそんなに印象に残ってたか？

でも、それにしても何故？

「とりあえず・・・今考えるのは止めよう？私疲れちゃった・・・」

「でも・・・」

「答えは見つけていけばいいよ。この世界に来てから一日しか経ってないでしょ？」

そう言うとシャムはソファアの上に寝転がった

「わかったよ・・・答えは見つけていく」

「うん、それがいい」

そっだ、焦らなくていい

敵に追われているならまだしも、今は安心して休めるところがある

それだけでも十分だ

「俺も腹減ってたけど、寝る」

「眠気には勝てないよねー」

「これは世界共通なんだね」

俺はシャムの寝ているソファの下に横になった

「そっいえば、なんで昼で帰ってきたの？」

「・・・」

「シャム？」

「・・・」

べつやら寝てしまったようだ

ま、いいか

結局目を覚ましたのは夜

朝シヤムの手料理を食べたので夜ごはんは俺が作った

味はまあまあだったがシヤムは大層喜んでくれた

作ってくれたことが何より嬉しいと

この時俺は、本当にいい人に拾われたなあと思った

そして・・・次の日、シャムから一本の電話が入った

シャムが機動六課に通勤したあと、部屋の掃除をしている時に携帯に連絡が入った

シャムの話によると、テーブルの上に大事な書類を忘れたので届けてほしいとのこと

なんでも今日必ず必要なほどの書類らしい

簡単だ、食堂でシャムが待っているからそこに書類を届けるだけ

だけど俺の場合は違う

またあの地獄（機動六課）へ侵入し、時間を見計らって最強部隊の

目をかわし（特に部隊長の）、誰にも気にも止められず（特にペンクのポニーテールの人に）、脱出しなければならない

俺の中で機動六課はこの世の恐いものベストテンに入っていた

昨日の一件で非常に、ひじょーに行きたくなかったがこの書類がなくてはシヤムが困る

だったらもう答えは決まっていた

「……………うまくいきますように！」

俺はシヤムの部屋に鍵をかけ、機動六課に向かった

時間は昨日と同じくらい

上手くいくかは運しだいだ

戦闘！機動六課より（前書き）

あいかわらずグダグダです

苦手な方はご注意ください

戦闘！機動六課より

「ついに……来てしまった……」

目の前にそびえ立つのは、何を隠そう機動六課

市民の平和を守る部隊が所属するもはや正義そのもの

しかしどうだろう

俺にとっては地獄の門にしか見えないのだ

それと言つのも昨日のことが原因だろう

誰だって初めて行った場所で死ぬ気で追いかけて回されたらトラウマ
どころか二度と近づく気すら起きなくなってしまう

ただ今はそれでもやらなければならぬのだ

「……上手くいつてくれよ……」

そうして俺は玄関の扉に手をかける

どうなるかはわからないがやってみよう

〈機動六課内〉

「ふう……よし、いいぞ」

俺は自分でもビックリするほどの巧みな潜入スキルで廊下を突破し
食堂へとたどり着いた

あとはシャムに会うだけだ

「シ……シャム……？」

いつ見つかったも逃げられるように俺はゆっくりと食堂に入った

「あ、ダン！こっちこっち！」

案の定、食堂にはシヤムしかいなかった

「あーよかった、無事会えた」

「随分と大変だったんだね」

シヤムに背中を擦られながら俺はテーブルへと座った

「で、これ？」

俺は懐から書類が入った封筒を取り出した

どうやらビンゴだったみたいだ

シャムは満面の笑みを浮かべ俺から書類を受け取った

「うん！これこれ！ありがとうダン！」

シャムは嬉しそうに書類を抱きしめる

やはり何かして他人に喜んでもらうというのはいいもんだ

「さてと、あと・・・問題はここからどうやって出るかだ」

そう、今の俺は敵のテリトリーに飛び込んだ餌そのもの

見つかってしまえば今度こそ何をされるかわからない

「それなら大丈夫だよ。今はシグナム副隊長たちは朝の訓練中だから」

どうやら慎重になるだけ無駄だったようだ

これなら、念のために持ってきた銃も使わなくて済みそうだ

「帰って朝ごはん？」

「え？あ、うん。ごめん、寝坊しちゃって・・・」

「仕方ないよ、あんなことがあった次の日だもん。疲れてたんだね」

シャムは微笑みながらそう言った

今話した通りだ、俺は今日寝坊してしまった

起きた時にはシャムはもう出勤したあと

テーブルの上には俺の分の朝ごはんがラップしてあった

シヤムに感謝しながら、まずは少し掃除をしようとしていたところに電話が掛かってきたというわけだ

「それじゃ、そろそろヤバそうだから見つからないうちに帰るよ」

「うん、わかった。もうちょっとで来そうだし、お掃除よろしくね

」

俺は手を振っているシヤムに手を振り返し食堂をあとにした

く廊下

「ちとど、帰りますか」

俺は来るときとは違い、警戒することなくごく自然に歩いていた

あの人たちはまだ来ないし、大丈夫でしょう

そう思いながら、食堂を出て二つ目の角に差し掛かったときだった

ポフッ

と何かが俺の胸にぶつかった

「あ、すいま・・・せん」

ぶつかった人を観察してみよう

その一、相手は俺よりも身長が低い

その二、その人は女性

その三、その人は髪が長く後ろで一つに結んでいる

その四、髪の色は栗色

その五、その人は複数の人たちとおそらく食堂に向かおうとしていた

その六、その中にとても見覚えのあるピンク色のポニーテールの人
が一人

134

「じつちこそごめんね・・・って君は！」

俺の胸から顔を離れたその女性は、俺の顔を見ながらそう言った

俺もその顔に見覚えがあった

あのととき、昨日食堂で俺に目を向けたメンバーの一人だ

この栗色の髪を覚えている

ということは次に起こすアクションはもう決まっていた

目の前にいるのは、おそらく俺を追いかけ回した茶髪と少女？を除くメンバーそのもの

俺が自分の脳内のアラートに気づくのは、そう遅くはなかった

「すいませーん!！」

「っておい！テストアロツサ逃がすな！」

逃げるしかなかった

逃げなければ殺される

そんな考えしかなかった

後ろを見ればわりと本気である人たちが俺を追ってくる

だけど不思議と・・・なんだか逃げられる感じがする

なんでだかわからないがそんな気がするのだ

だからそう簡単に捕まるわけがない

その丁字の角を右に曲がれば出口だ

だが、逃げ切れることを確信していた俺の思考はあっさり崩れた

「はい、行き止まりだよ」

「うわ！」

角を曲がった先には、さっきまで俺の後ろにいた金髪美人がいた

なぜかさつきとは服装が違う

見るからにバトルスーツといったものを纏っている

しかしなぜ？

どうやって回りこんだんだ？

いや、今はそんなことどうでもいい

俺は方向を後ろに変え反対方向へ逃げようとするが

「はい、こっちも行き止まり」

追い付いたのだろう、さつきの栗色の髪の美女とその一行が立っていた

「おい貴様！昨日のあれは何だ！どこで訓練した！」

「ぐ……!!」

俺の胸ぐらを掴みながらピンク色のポニーテールが問い詰める

だが俺にもわからないのだ

どうしてあんな風に戦えるのか

「まあまあシグナム、放してあげて」

俺がつかうそうなのが目に入ったのか、金髪美人がピンク色のポニーテールを手で制し俺を解放させた

「ごめんね、大丈夫？」

床に手をつけながら咳き込む俺に手を差し出しながら栗色の髪の人
人がそう言う

「・・・大丈夫です」

俺は差し出された手を取らず自分で起きあがった

一瞬悲しそうな顔をしたが今はそんなことに構っている場合ではない

「それじゃ、俺はこれで」

俺は半分どさくさに紛れながら機動六課を後にしようとしたがそうは問屋がおろさなかつた

「ちょっと待って、何で逃げようとするのかな？」

栗色の髪美人さんは玄関へ向かおうとする俺の腕を掴みそう言った

俺は早く逃げ出したい一心で、後ろに振り返り何かと理由をつけ放してもらおうとしたが、とてもとても素晴らしい笑顔だがその裏に

とてつもなく恐ろしいものが見える表情を見て何も言えなくなってしまうた

「ほ……ほら、まだ朝ごはんもまだですし……」

かるつじて出てきたのはそんな理由、だが俺はすぐ相手の策にはま
ったことに気づいた

「それなら、皆と一緒に食べない？」

「うん、そうしょ？」

栗色の髪美人に同調するように金髪美人もそう言う

そう、これから俺は食事という名の尋問にかけられてしまうのだ

「で……ですけどあれですよ、その……こう……団らんを邪魔したくないというかですね……」

「皆いいよね？」

「」「」「はい！」「」「」

どつちらどんな策を持ってしてもダメなようだ

「では早速行くぞ。お前に聞きたいことが山程ある」

「え？あ……ちょ、待ってくださいよー！」

ピンク色のポニーテールの人が、なかなか行こうとしない俺の服の襟を掴み食堂へ引きずって行った

（食堂）

「じゃあ、いただきますーす」

「「「「「いただきますーす」「」「」」」」」

「いただきます」

「い・・・いただきます・・・」

目の前にあるのはごくごく普通の朝の定食、作った人の愛情が詰まったとても素晴らしいものである

しかし、今現在俺の周りにはおそらく俺がぼろを出すのを今か今かと待っている管理局が誇るエースたち

右手にありますのは聞くところによると管理局のエースオブエース高町なのはさん

左手にありますのは聞くところによると速さなら誰にも負けない美人執務官フェイト・テストロッサ・ハラオウンさん

正面におりますのは聞くところによるとバトルマニアで勝負好きで模擬戦大好きな、気のせいかな『勝負』とか『バトル』とかいう単語しか聞こえてこない烈火の将シグナムさん

そして俺たちのことを見ている四人組は高町さんやテストロッサさんやシグナムさんの大事な教え子だという

そんな中、落ち着いて朝食をとれるわけがなく俺は座ったままである

「うん？これは……珍しいお客さんかな」

「あ、はやてちゃん」

テーブルに近づいてきたのは、聞いたところによると機動六課の部隊長、つまり一番のお偉いさんで狸（狸？）な八神はやてさん

「なんや、私たちと朝ごはん食べたいなら言ってくればええのに」

「いえ、このお方がたに・・・拉致られました」

「ダメやないか皆、ダンテくん困らせるようなことしちゃ」

すると他のメンバーは、察したのか苦笑いを浮かべていた

「って、な・・・なんで俺の名前を？」

「それくらい簡単や」

方法は秘密やで、と八神さんは言う

そしてさっきから気になっていたのだが、ピンク色の髪の少女が俺と話したいのかうずうずしながら俺と八神さんの会話をきいている

「うーん、それじゃ・・・次はキャロにバトンタッチや」

「え！？あ……あの、キャロル・ルシエ三等陸士です！よろしくお願いします！」

「あ、ああ。どうも……」

ルシエさんが頭を下げたのでこちらも頭を下げる

それにしてもこんなに小さいのに命をかけた仕事ができるなんて凄
い……

俺には絶対無理だ

「あ……あの！」

「……はい？」

ルシエさんは緊張しているのか、少し声を張って話しかけてきた

「あれってどうやるんですか!？」

「あ……あれって？」

「あの、空き缶シュート?みたいなやつです……」

多分ルシエさんが言っているのは、昨日ここに来たときに見せたあれのことだろう

あれは少しコツを掴めば誰でもできるのだ

そういえばあれを見てあんなに喜んでくれたのはルシエさんくらいだ

「まあ……機会があったら教えてあげるよ」

「は……はい!是非!」

そんなに凄かったらどうか?

「よかったね、キャロ」

嬉しそうなルシエさんに笑顔を向けるテストロッサさん

こつこつと見ると親子のように見える

「じめんはやて、遅れた……つてお前！」

「あ、どうも……おはようございます……」

目の前には、昨日の赤い髪の少女？がいた

「なんているんだ？」

「私たちが誘ったんだよ、ヴィータちゃん」

「とういわけなんです・・・」

「まあ、聞きたいこともあったしちょうどいいのかもな」

ヴィータさんはシグナムさんの隣に座った

「お、皆揃ったな」

見ると八神さんは自分の分の朝食を持ってヴィータさんの隣に座った

「それじゃ私も、いただきます。ダンテくん、悪いんやけどそのコップ取って？」

「あ、はい。わかりました」

「こうしてみると本当に普通の女の子にしか見えない

だけど相手は部隊長、この部隊をまとめているのである

俺と同じくらいなのに信じられない

「あ、ダンテくん。機動六課入って？」

「あ、はい。わかりまし・・・せん！」

もの凄く自然に、それはもうその調味料取って然的な感じで言われたその言葉に俺は危うく自然に返してしまうところだった

149

「なんや、引つ掛からなかった」

「なんやじゃないですよ！何言ってるんですか！」

「何って、機動六課に入らんかったちゅう話やねん」

いきなりそんなこと言われてもこっちが困る

機動六課はおるかこのミッドチルダとかいう街の右も左もわからないのに、いきなり入れなんて言われても慌てるだけやん！

あ、関西弁になってもった

「とりあえず場所を変えようか、訓練場に来てくれんか？皆も食べ終わったころやし、あんたも腹いっぱいみたいやしな」

というか緊張して全然食べられませんでした

「言っておくけど部隊長命令な、管理局の指示には従ってもらおう？」

「まったく・・・わかりましたよ。えっと・・・そのの、その青い髪の子」

「え？私ですか？」

名前がわからないので、失礼ではあったが指を差して青い髪の女の子を呼んだ

その女の子に俺の朝食を食べてもらうように頼んだら、ものの数十秒で平らげてしまった

「あんだ、凄いね・・・」

「え、えへへ・・・お恥ずかしながら・・・」

青い髪の女の子は少し顔を赤くしながらそう言った

しばらくすると八神さんも食べ終わり、訓練場に行くために指示を
出した

そして俺は半ば強制的に訓練場・・・というところへ連れていかれた

↳機動六課内廊下↳

「あの・・・これから俺何されるんでしょうか？」

「うーん、はやてちゃんのことだから戦わされると思っよ？」

高町さんに尋ねて見ると、そういうた答えが帰ってきた

にしてもまた戦うのか・・・

「たぶん、相手はシグナムさんだと思う」

「ああ……わかります」

後ろには、それはもう凄まじい覇気といつかなんといつかそんなものを纏ったシグナムさんがいる

例えるなら、おあずけをくらった犬みたいだ

「早く、早く戦いたい！」

「まあ落ち着けてシグナム」

そんなシグナムさんをヴィータさんが必死に抑えている

「ヴィータさんも……大変ですね。お姉さんみたいですよ？」

「まあな……って、今なんて言った？」

「え？えつと・・・ヴィータさんも大変ですねと」

「違う！その後！」

ヴィータさんは何やら期待するようなオーラを纏い俺に迫ってきた

「ああ、お姉さんみたいですよって・・・」

「・・・ほんとか？」

「はい？」

ヴィータさんはより一層目を輝かせながら迫ってきた

「ほんとにそう見えるか!？」

「え、ええ。大人の魅力がある素敵な女性だと・・・」

他の人がどう思うかわからないが、なんとなく俺には、俺より長生きしてるように思えた

「お前、いいやつだな！」

そう言いながら俺の背中を叩くヴィータさん

そんなに・・・嬉しかったのか・・・？

（機動六課内訓練場）

「待っていたぞ！この時を今！」

「は・・・はあ」

目の前には、剣を構え始まるのを今か今かと待っているシグナムさんがいました

「えっと・・・シグナムさん？」

「さあ早く！早く！！」

クールなイメージなどお構い無しにシグナムさんは俺が準備するのを今か今かと待っています

・ 他のメンバーは観覧席らしきところに座り、これまた今か今かと

やるしかないのか・・・

そう思い渋々銃を構えると

周りの空間が歪んだ気がした

逃走！機動六課内（前書き）

文章力・・・文章力が欲しいです！

あまり文章力がありません

苦手な方はご注意ください

逃走！機動六課内

「ああ……またかよ……」

目の前に広がる光景に、俺は溜め息をついた

あの時の公園

場所は違うものの起きている現象は同じだった

周りの色は変化し、ホログラムのようなもので再現されたはずの壁からは赤黒い液体が流れている

だが、今回はそれだけではなかった

構造までもが変化したのだ

壁の一部が飛び出し、床が一部盛り上がり、ヒビが少し入った

たしかに、ホログラムなら理解はできる

だがそれは、誰かが操って初めてできるもの

今回は、自分以外の気配はしない

まるでこの建造物自体が意思を持ち変化したような

そんな感じがする

それともう一つ恐れていたのが・・・

「な・・・！おい！何処へ行った！」

「ダンテ君！？皆！手分けして探すんや！」

「あー、ここにいますよー」

俺の目には、体が半透明になって透けている八神さんたちが俺のこ

とを必死になって探している姿が見えた

そう、俺が恐れていたのは俺以外の人が今の俺を見たときどんな反応をするのかということであつた

「ダンテ君！・・・どうしたの、その体・・・」

高町さんが俺に駆け寄り、まるで信じられないようなものをみた表情でそう言った

「な・・・！体が・・・透けている・・・！」

「お・・・おい・・・」

「ダ・・・ダンテ君！大丈夫・・・」

八神さんもシグナムさんもヴィータさんもテストアロツサさんもあの教え子の四人組も困惑した表情で近寄り、八神さんは俺に触れようとしたがその手は俺の体をすり抜けただけだった

「と、とりあえずこのまま待っててや！今シャマルに連絡を・・・」

「ダンテ君！大丈夫だから落ち着いて！」

八神さんはシャマルさんという方に連絡を、テストロッサさんは俺に落ち着くように語りかける

だが今は・・・そういうわけにはいかないようだ

「な・・・！」

「・・・！？ダンテ君！？どうしたの！？？」

「逃げてください・・・！早く！」

困惑する高町さんたちの後ろには、またまた同じようにあのときの・

・

化け物が姿を現した

姿形は変わらないものの、数が以前より増えている

十、いや十二か・・・？

「どっしたの！？何かいるの！？」

高町さんは俺が見ている方向に目を向けるが、どっちら見えていないようだ

一体どうなって・・・って！

「逃げろってどっいっことや・・・ってダンテ君！？」

どっちら、』そちらの世界』には音は聞こえるらしく、剣で切り裂

く音だけが無情にも響いていた

――

目の前の光景に、私は何も言えなかった

あの人の戦闘力は昨日少々騙すようなことをしたが知ることができた

ただどこれはなんや？

ダンテ君はいきなり半透明になり、おそらく・・・私たちの知らない場所で、知らない敵と戦っている

この世界でしばらく暮らしてきたがこんな出来事は初めてや

いや、私たちが知らないだけか？

ということとは、この現象に何も抵抗できずダンテ君みたいな戦闘力も持たない一般の人たちが巻き込まれているかもしれないっていうことか？

でも、そんな事例も一切ないし・・・

ダンテ君、あんたほんまに何者なんや・・・？

目の前の敵を倒すため剣を振るうものの、数が多いためか一向に減らない

四方八方に散らばるため、決まった敵にダメージを与えることができない

鎌や斧に変化し切り裂いてはいるが、注意が全ての敵に向いているため落ちて着いて狙うことができないのだ

「・・・くそっ！」

そうしている間に全方向を囲まれてしまっていた

いくら臨機応変に戦えると言ってもこの数はさすがに・・・

「ダンテ君！大丈夫！？」

ふと横を見ると、高町さんたちが悔しそうな表情をして俺を見ていた

「いや、どうもダメみたいです・・・」

多分・・・悔しいのだろう

実力は申し分ない、戦闘のこととなれば尚更だと思っ

そんな人たちが目の前で一人必死になって戦っている人に、一切手助けできないのだ

今にも死ぬかもしれない人に何もしてやることができないのだ

「・・・」

俺は何も言えなかった

死ぬかもしれないと思った

この世界に来てから何回目だ・・・？

まだ三日くらいしかこの世界にいないのに

シヤム・・・ごめんね・・・

敵はそんな俺のことなどお構い無しに、一斉にかかってきた

もうダメだ・・・と思ったそのとき、一つの戦術が浮かんだ

――――

「ダンテ！」

一瞬浮かんだのはあのときの出来事

頭の中に残り続けているあの惨劇

守りきれなかった仲間

あいつが放った『もうダメだ』という言葉で次に何が起こるのか簡単に予想がついた

何とかしたかった

あたしのことを唯一大人扱いしてくれたあいつを

でもどうすることもできないのだ

触れることすらできない

「……！」

また惨劇が起こるのか……と思ったその時、あいつの姿が変わった

(とにかくやってみるしかないか！)

敵に全方向を囲まれるという危機的な状況で唯一浮かんだ戦術

これで切り抜けられるなんて全くわからない

方法は簡単

剣に力を込め地面に突き刺すだけ

本当にこれだけなのだ

ただどこれをやらないと確実に死んでしまうだろう

(そうだ・・・何もしないで死ぬよりマシだ！)

そう思い俺は戦術通り、剣に力を込め地面に突き刺した

するとどうだ、その場にいた全ての敵が空中に舞い上がったではないか

地面から赤黒い炎のようなものが相手の下から吹き出て、それにより舞い上がった敵が空中に浮いているのだ

そして周りの風景も変わった

白い霧のようなものが広がり、それが左回りにぐるぐると回っている

そして俺の格好、黒だったはずのコートは赤色になり髪は銀髪になった

それとなぜだか、普段より力が溢れてくるような気がする

なんでも倒せるような、そんな錯覚さえ覚えてしまう

だが今はそんな場合ではない

これは絶好のチャンスだ

俺は一体に、鎌をワイヤーのように伸ばし相手に近づいた

どうやら鎌を使えるときはワイヤーを使うと、その物体に近づくとができるようだ

「おりゃー！」

俺は近づいた一体を鎌で切り刻み、次に同じように違う一体に近づいたあと鎌から斧に変化させまた違う一体にワイヤーを引っかけてつちに引き寄せた

どうやら斧が使えるときにワイヤーを使うと、その物体を引き寄せることができるようだ

そして、近づいては引き寄せてまとめて剣か斧か鎌で切り刻む、そしてまた違う一体に近づき引き寄せ切り刻むと言った戦法を繰り返して、最後の一体は鎌で地面に叩き落としたあと斧に切り替え、地面にいる一体に向かって振り降ろし文字通り粉々に粉碎した

その際、相手から飛び散った血のような液体が全身にかかる

この化け物たちも、こんな形ではあるが生き物のようだ

「ダンテ君！」

戦闘が終わり地面へたりこむ俺に、八神さんたちが駆け寄ってきた

その表情は、そうとう切羽つまったものであるのがわかる

「今のはなんや！何と戦ってたんや！」

八神さんは俺に掴みかかろうとしたが、それが叶わないことを思い出し声を荒らげて迫ってきた

「それが・・・まだ俺にもわからなくてですね・・・」

「まだってことは前にもあったのか！何故言わなかった！」

シグナムさんは俺を睨むような表情で迫ってきた

業務上でも偽りでも何でもなく、一人の人間として心配してくれていた

「ダンテさん！大丈夫ですか！？」

ルシエさんを筆頭にあの四人組も駆け寄ってくる

「とりあえず今度は会議室に来てや・・・ここにいたら何が起こるかかわらんし、もう訓練どころの話やないしな・・・」

八神さんの言葉に他の皆も頷く

八神さんはそのあと皆に、この事はここにいるメンバーだけの秘密、絶対に外部には知られないようにと念を押しした

確かにこの事が外部にバレたらパニックどころの話ではなくなってしまう

「じゃあ次はダンテ君がどうやって戻るかだね。ダンテ君、何かわからないかな？」

高町さんが尋ねてくる

何か・・・

前に公園でこの状況になったときにどうやって戻ったのか

可能性があるとしたら・・・

「・・・コウモリ」

「コウモリ？」

「はい、確かコウモリが・・・」

あの時、公園で襲われたあの時

空中を飛んでいるコウモリに気がつき、それを撃ち抜いたら元の世界に戻る事ができた

とどういふは・・・

「あ、あれじゃないですか!？」

赤髪の少年がとある場所を指さした

そこにはあの時と同じコウモリが、空中を飛びながらまるでこちらを監視するように見ていた

ん? 待てよ・・・赤髪の少年にも見えていて俺にも見えているということは、あのコウモリはこっちの世界でもあっちの世界でも見えているということか・・・

「で、あのコウモリをどうするんや?」

「はい、あのコウモリを・・・」

何でもいいので倒してくださいと言おうとした時だった

『ダアアアンテエエエ!』

・・・聞こえない

聞こえない聞こえない

そんな地獄の奥底から聞こえてくるような声なんて何処からも聞こえない

「ダンテ君どうしたの？そんな驚いたような顔して、・・・まだ敵がいるの！？」

「いえいえ、大丈夫ですよ。なーんにもないです、なーんにも」

ほら見る、テストロッサさんにも聞こえてないじゃないか

だからあれは幻聴

いきなりの戦闘のあと、案外簡単に脱出する方法が見つかったから安堵のために聞こえたもので

『ダアアアアンテエエエ！！』

「あ、コウモリが逃げました！いいんですか！？ダンテさん！」

どうやらこちらの世界にいる時は、たとえ敵を殲滅させた後でも決して油断してはいけないようだ

その証拠に出入口の反対の方向にある壁が、まるでテーブルの上にある消しゴムのゴミを落とすかのように、みるみるうちに迫ってくる

それも・・・無数の針のオマケつきで

驚いた表情をしてダンテ君は、私たちとは反対の方向を見ている

あの戦闘を見て、一人で戦っているダンテ君を見て、私は一瞬昔の自分と重ねてしまった

一人で戦っていたあの頃、そんな私に手を差し伸べてくれた今では大切な友達

だけど今のダンテ君には、手を差し伸べるところか触れることすらできない

そんな現実が、私は凄くもどかしかった

「ダンテ君どうしたの？そんな驚いたような顔して、・・・まだ敵がいるの!？」

だけど、語りかけることはできる

それもなのはから学んだ

そう自分に言い聞かせダンテ君に話しかけてみたら、なんでもないの一点縛り

だけどそんな言葉とは裏腹に明らかに表情が焦っている

まるで大きい何かに怯えているかのように

「……………てください」

「え？」

「あのコウモリ倒してください！あー来たー！」

「え！？ってダンテ君！」

ダンテ君は何かから逃げるように一目散に訓練場の出口へ飛び込んだ

何が起こったのかわからないけど、とにかくあのコウモリを倒さない
ないとダンテ君が危ないらしい

「エリオ、キャロ。訓練で得た技術の見せどころ、行くよ！」

「はい！」

「スバル、ティアナ。私たちもだよ！」

「はい！」

「よし、私たちも行くで！」

「はい、主」

「ああ！」

ダンテ君！なんとか持ちこたえて！

――

訓練場を出た俺は、機動六課の中を走りに走り回っていた

それはというのも

『ダアアアンテエエエ！』

この声から逃げるためであった

正しくは『この世界』からか

訓練場の壁は出入口まで迫ってきて止まった

どうやら、動いたのはこちらの世界の壁だけらしくあっちの世界には影響はないようだ

そして俺は確信した

この声はこの建物・・・いや、この街自体の声だということだ

ということだ、この街自体が俺を殺そうとしているわけだ

「おいおい、そりゃないぜ……ってうわー!」

そんなことを考えているのもつかの間、T字路に差し掛かりそのまま前進しようとしたが壁が床から生え行き止まりになってしまった

その壁にスクリーンが登場し、赤くおぞましい文字で『ダンテ』とこっちの言葉で書いてある

どうやらこっちの街はとことん俺のことが嫌いなようだ

俺は仕方なく左に曲がり、次々と周りの壁やら床やらが変化していく中を早く逃げようと走り続けた

「え?うわー!」

突如、奥まで一本道だった通路に壁が出現したかと思うと

『フォー』

とおそらく書かれたスクリーンが登場し、その直後に床が崩れ落ちて下に落ちてしまった

「いてて・・・食堂？」

落ちたところは食堂へ向かう真っ直ぐな通路

俺も朝通った道だった

「一体なぜ・・・ってやべやべやべー！」

考える時間もなく、後ろからは訓練場と同じように壁が迫ってくる

もちろん針のオマケつき

「ダンテ君！」

隣から聞こえたのは高町さんの声

よく見たら訓練場にいたメンバー全員が高町さんの後ろにいる

皆一生懸命探してくれたのか・・・

「なんとか食堂に追い詰めたで！もう少しや！」

反対隣からは、はやてさんが声をかける

どつちやらあのコウモリを食堂に追い詰めたらしい

いずれにせよこれで脱出できる

俺は勢いよく食堂へと飛び込んだ

〈食堂〉

「よつとー！つてつわー！」

壁の襲撃をギリギリで避け、俺は食堂へと飛び込んだ

壁は食堂の入り口でつかえもう追ってくることはない

あのメンバーたちがいる世界では壁は迫ってきていないため、壁をすり抜けてきたような感じで食堂に入ってきた

「なんとか助かつ……た……」

顔を上げたときに飛び込んできたのは、とても食堂とは言えない変わり果てた風景だった

壁全体は血の色のように真っ赤に染まり、天井からは血のようなものが滴っている、ここで食事をしたいですかと問えば千人中千人がノーと答えるようなそれはそれはひどいものだった

「ダンテ君、どうしたんや？何か見えるんか？」

ええ、ぜひぜひあなたにも一度見せてあげたいですよ……ってそんなこと考えてる場合じゃない

「コウモリは！？コウモリはどこにいます！？」

俺は食堂に追い詰めたというコウモリを探した

あれがこの世界を脱出するための唯一のキー

公園のときは偶々見つけることができたがそれはあくまで偶然

ここで逃がしたらもう捕まえられないかもしれない

「あれじゃないですか!？」

オレンジ色の髪をした少女が指を差した先には、食堂の天井付近を
パタパタと飛んでいるコウモリがいた

こんな絶好のチャンスを見逃すわけにはいかない

「よし、あれを倒」

『スイミンググタアアアーム!』

「……は?」

またどこからか声が聞こえたかと思うと

「な！？むぐ……！」

いきなり食堂の天井が開き、そこから全体をつめつくすぐらしいの血のような液体が流れてきた

いや……正確には『落ちてきた』が正しいか

「むぐ……！が！」

もちろんそんな中で正確にコウモリを捉えられる筈もなく、俺はただもがくだけだった

「むぐぐ……む？」

意識を失いかげ朦朧としていたその時、桜のような色をした不思議なボールのようなものが目の前を飛んでいった

「ぐ……ああ！」

それがコウモリに命中し、俺は血の液体から解放された

周りの風景も元に戻っていく

「う……ゲホッゲホッ！」

俺は床に手をつき、必死に咳き込んでいた

あやうく溺死してしまうところだった

もしかしてこれを狙って……？

「ダンテ君！」

顔を上げると、さっきの食堂のような風景はなく

食堂という名にふさわしい風景へと戻っていた

そして目の前には、手を差し伸べてくれている高町さんと、若干顔を青くしているメンバー数人がいた

俺は高町さんから差し伸べられた手を今度は取るうとしたが

俺の意識はそこで途絶えてしまった

勧誘！機動六課より（前書き）

呼称が間違っている可能性があります

苦手な方はご注意ください

勧誘！機動六課より

「う・・・うーん・・・」

どのくらい眠っていたのだろうか

体の状態からすると仮眠というレベルではなく、結構深く眠っていたらしい

というかここは一体どこだ？

あの時、血のプールで溺れかけていたときにコウモリを誰かが倒して気を失って・・・

ダメだ、寝起きで朦朧とした意識の中で考えてもしょうがない

まずは簡単なことから

「・・・？」

病院のような天井、そして病院のようなベッド

まるで保健室のような場所

だけど先生らしき人が見当たらない

「よいしょっと・・・あ」

もっと周りを確認しようとして起き上がったときにベッドが血のような赤い液体で汚れているのが目に入った

なるほど、勝手に服を脱がせるわけにもいかなかったという訳か

時間・・・

そうだ時間だ

今は一体何時だ

6時半くらい

時計はそう示していた

午前じゃない午後だ

折角部屋を掃除しようとしていたのにこれじゃあ明日に回すしかないじゃないか

次に、今日はいつだろう？

いつもと同じように眠ったら30年も眠ってしまったっていう人の話しも聞いたことあるし……

「・・・探そ」

俺はこの保健室のようなところを抜け出し探すことに決めた

何日も経ってなければいいけど・・・

「機動六課？廊下・・・」

保健室のようなところを抜け出し、俺は廊下を歩いていた

たぶんここはまだ機動六課だと思う

俺が倒れても他に運びこむ場所なんて思い付かないし・・・

第一、すれ違う人たちが高町さんたちと同じような制服を着てるからここはたぶん機動六課だろう

人が人みんなすれ違うたびに俺の姿を見て驚いた表情をしているが

「き・・・君、大丈夫なの!？」

「あ、大丈夫ですよ。こんなナリですけど」

と言って血まみれのコートを見せその場を後にする

そんな行為が何回か続いた

・・・なんだか人通りが激しいような気がする

あ、もう夕食どきだからか

「・・・シヤマル、一つ聞きたいんやけど・・・」

「・・・はい」

「こんな体の構造してる人間見たことあるか？」

「私の経験上、今までは一度も・・・」

ダンテ君が倒れて医務室に運びこんだあと、ダンテ君には内緒で少しメデイカルチェックさせてもらい、その結果をなのはちゃんやフエイトちゃんら隊長陣で確認していた

フォワードのメンバーは訓練、このことは隊長陣の秘密や

と思っていたんやけど・・・

これはそんなレベルを越えてしまつとる

余裕で機密情報に該当してるで・・・

「主はやて、あいつは一体・・・」

「私にも一体何が何やらわからんのや・・・」

一体どんな世界からやってきたんやダンテ君

戦闘スキルといい、武器といい・・・不思議なことがいっぱい

「はやてちゃん、ダンテ君今は？」

なのはちゃんもフェイトちゃんも心配そうな表情してる

「大丈夫や、医務室でまだ眠つとるで」

起きたらダンテ君にも話聞かなあかな

というよりも、あんな逸材見逃すわけにはいかへん

「夕食前にこんな話しもなんや、あとは夕食後にしよか」

ダンテ君の必要書類、お願いしに行かんとな

「おう、食堂に来ちゃったなあ・・・」

適当にその辺を歩いていたら、巡り巡って食堂に着いてしまった

ちらほら人も集まってきた

それにこの格好、血まみれで鉄くさい、このまま入ってしまえばたちまち注目の的だ

下手すれば逮捕されるかもしれない

一体どうすれば・・・

「ダン!?!」

後ろから、それはそれは聞きかたかった声が聞こえた

振り返ると、驚きに満ちていながらもどこか安心した表情をしたシヤムがいた

シヤムは俺を見つけるや否や一目散に駆け寄って

「あ、シヤム」

「もう！心配かけて！倒れたって聞いたから私・・・私！」

勢いはそのままに抱き締めてきた

両手でしっかり背中まで手を回し、まるで母親のようによさしく

隣にいた同僚の人らしき女の人もやさしい表情で見守ってくれていた

「よかった・・・って鉄くさ！」

シヤムはしばらく抱き締めていると俺の今の匂いに気づいたのか、
背中に回していた手を戻し肩に置いた

「よく見たらその格好・・・血、血まみれ！？ちょっとダン！気を
しっかり！今医務室に・・・！」

「大丈夫大丈夫！俺の血じゃないし・・・」

どこかに連絡しようとしていたシャムを慌てて止め俺はわけを話した

あの世界のことは多少オブラートに包み必要なことだけを

「八神部隊長たちも手が出せないなんて・・・難しい問題だね・・・」

「まあ、生きてるだけよかったっていうか・・・」

「ホントにもう、ダンはねえ・・・」

シャムは腕を組みプンプン怒っている

そういえば他人からこんなに親身になって怒られたのっていつぶりだろう・・・

あ、またまたそういえば今日はいつだったかっていうこと忘れてた

「シヤム、今日はいつ？30年後とかじゃないよね？」

「30年？今日は今日だよ。30年どころか1日も経ってないよ？」

よかった、何日も眠っていたわけじゃないのか

シヤムが切れて上司のところの殴り込みに行くんじゃないかと思っただけど大丈夫そうだ

「「「ダンテ君！」「」」

今度は、今の状況ではあんまり聞きたくなかった声がシヤムの向こう側から聞こえてきてしまった

『聞こえてきた』じゃない、聞こえてきてしまったちゃったの

「ダメやないか！勝手に医務室抜け出したら！」

「でもよかった、六課を出ていったわけじゃなかったんだね」

八神さんたちは心底心配してくれていたみたいだ

顔を真っ青にして俺に話し掛けてくる

というか、こんな状態になった原因ってそもそもあなた達ではありませんか？

「ごめんなシャム、少しの間ダンテ君借りてもええか？」

「いいですけど・・・あまり無茶はさせないでくださいね？じゃあダン、家でねー！」

そういうとシャムは同僚の女の人と食堂に行ってしまった

できれば行ってほしくなかったんだけどな・・・

「さてダンテ君、いろいろ聞くんは夕食のあとにして、まずはシャワーでも浴びてきたらどうや？その格好で食堂入るんはちょいキツイでっ。」

八神さんは俺の全身を見ながらそう言った

だけどシャワーがある部屋までの道のりがわからない

「私が案内するよ、いい？はやてちゃん」

「ええよ、じゃあ私たちは一足先に食堂に行ってるな？頼むでなのはちゃん」

高町さんに案内を頼むと八神さんたちは食堂に入っって行ってしまった

「じゃあ行くっか」

「は、はあ・・・」

くおそろくシャワールームへの道く

「へえく、ダンテ君は18歳なんだね」

「はい・・・もうバリバリの18歳です」

「私は19なんだ、一つ上だね」

「・・・先輩ですね」

行く道中、てつきり会話がなくなり嫌な雰囲気になるかと思ったら、案外気さくに高町さんは話し掛けてきてくれた

とは言っても俺はまだまだ話し方が堅いが何も喋らないよりはマシだ

「あの……今日はゴメンね？」

「はい？」

高町さんは、話を止めたと思ったら次は謝ってきた

何か高町さんが俺に謝らなくてはならないことをしただろうか？

「私たちのせいで……危ない目に遭ったんだよね……」

「あ、えっと……」

高町さんは悲しそうな表情に変わり、言葉続ける

「人を助ける立場にあるのにこれは許されないよね……、あの後みんなで話したんだ、ダンテ君に謝ろうって」

それは別に・・・

「だから私たちのこと・・・嫌いにならないでほしいんだ」

すると高町さんは立ち止まり、俺に頭を下げながら言った

「本当に申し訳ありませんでした」

それは本当に心からの謝罪、とても誠意が籠ったものであった

だけど、あれは誰にも予想出来なかったこと

高町さんたちが謝るものではない

むしろ俺が謝ることだと思う

無関係な高町さんたちを巻き込み、迷惑をかけて・・・

「そ、そんなそんな！顔を上げてください！」

俺は慌てて高町さんに頭を上げるように頼んだ

こんなことしても無意味だ

高町さんたちは何も悪いことしてないのに

「で・・・でも、私たちのせいで・・・あんな・・・」

「だから高町さんたちのせいじゃないですって、あれは誰にもわからなかったことですし・・・第一、今こうして生きてるじゃないですか！」

そう、あんなことがあったけど今こうして生きている

死んだら死んだで大変だったけど、生きているし結果オーライだ

そのことを高町さんに伝えた

相手の事情とかもわからないし少し簡単な考えだったけどそれでも、高町さんはまた笑ってくれた

「ダンテ君・・・優しいんだね」

「・・・気のせいですよ」

そしてまた、高町さんと歩き始めた

暗い話はせず、明るい話題を話しながら

「フェイトちゃんいつも一人で無茶するから、目が離せないんだよねー」

「高町さん、優しいんですね」

そう言うと高町さんはむっとした表情をして切り出した

「その・・・高町さんっていつのなんか堅苦しいなあ、なのはでいいんだよ?」

俺の顔を覗きこみながらそう言う

「で・・・ですが・・・」

「なーのーは、はい」

高町さんは何かを期待するような目で俺を見てくる

だけど、ほとんど初対面の人を名前で呼ぶのは・・・

「な……」

「うん？」

「なの……」

「うんうん」

「なの……あー！シ……シャワールームってここじゃないですか！？案内ありがとうございましたー！」

「え？あ、ちよ……ダンテ君！？」

高町さんの言葉を背中に受けながら、俺は逃げるようにシャワールームに入った

さすがに名前で呼ぶのは恥ずかしい……

（シャワールーム内）

「あー、生き返るー」

シャワーが体を流れ、血も鉄くさい匂いも洗い流していく

シャワーは絶妙な温度に保たれており、それがまた心地よい

「あれ？ダンテさんですか!？」

俺の隣の個室から聞こえてきたのは、あの赤髪の少年の声だった

「あーはい、俺ですよー」

「怪我は大丈夫なんですか!？医務室にいないと・・・!」

「もう大丈夫ですよ、だからここにいるじゃないですか」

赤髪の少年に誤解のないように伝えた

今ここに居るってことは、何かの練習をした後なのか・・・訓練？

（シャワールーム前廊下）

「・・・なるほど、訓練だったんですか」

「はい、みんなシャワーを浴びてから夕食を食べようって話になっ
て・・・」

どうやら訓練が終わり、みんなで夕食を食べに行く前にシャワーを
浴びていた際に俺が入ってきたというわけらしい

「凄いですね、えっと・・・」

「あ、エリオっています！エリオ・モンディアル三等陸士です！」

モンディアルさんは俺に敬礼しながらそう言った

気のせいなのかもしれないが、何だか子供の比率が高いような・・・

「モンディアルさんも凄いですね。まだ子供なのに・・・」

「あゝ・・・」

モンディアルさんは何だか不満そうな表情を浮かべて話し掛けてくる

「その呼び方・・・」

「エリオくん、お待ち・・・ってダンテさん！」

モンディアルさんが何かをいいかけたその瞬間、女子のシャワールームからルシエさんが出てきた

たしか、他に三人居るって言ってたっけ

「大丈夫ですか！？お怪我は・・・！」

「あー、大丈夫ですよー」

「ダンテさん！」

ルシエさんの後ろを見ると、残りの二人も出てきていた

なるほど・・・この四人は同じチームみたいなものなんだ

「お怪我は大丈夫ですか！？」

青髪の女の子が俺を見つけるや否や駆け寄り話し掛けてきた

「もうスバル！大声出しちゃダメでしょ！すいませんダンテさん」

その後から出てきたオレンジ色の髪の女の子が青髪の女の子の頭を
掴み、自分と一緒に下げさせた

「いやいや大丈夫だよ、それに体の方もね、特に怪我は無かったし・
・」

「本当ですか！？良かったです」

青髪の女の子は俺の状態に安心したのか安堵した表情になった

「ダンテさん、私たちこれから食堂に行くんです。一緒にどうですか？」

ルシエさんが俺の顔を伺いながら言った

なるほど、また医務室に戻っているのか

まあ、このまま逃げるっていう手もあるけど、そんなことしたら地の果てまで追ってきそうな方々がいるので却下

そうしたらもう答えは決まっていた

「私で良ければ喜んで」

「やったー！じゃあ行きましょう！」

「え？あ、おっと」

ルシエさんは俺の手を引き食堂へと歩き出した

なんだか妹ができたような感じだなあ

「ふんふん」

「えへへ」

現在俺の右手をルシエさんが、左手を羨ましくなったのか途中からモンディアルさんが繋いできて二人に引っ張られている感じになっている

「なんだかお兄さんみたいですね」

「そういう風に見えます？えっと・・・」

「スバルです！スバル・ナカジマ二等陸士です！」

「お二人は仲がいいんですね？えっと・・・」

「ティアナ・ランスター二等陸士です。スバルとは同期です。」

「あ、学校が同じだったんですね？」

「まあ、そんな感じですよ。」

「ティアは凄いですよ！」

古くからの友達というわけか、同じ職場で働けるっていうのはいいね

221

「モンディアルさんとルシエさんも？」

「はい、僕たちは家族なんです。フェイトさんに引き取ってもらって」

「あ……ごめんなさい」

自分が一体何を聞いてしまったのか一瞬でわかった

複雑な家庭の事情

俺の居た世界ならまだしも、このように魔法というものが存在し、
いつどこでどのように命を落とすかわからない世界じゃ家庭が複雑
になる人も少なくない

モンディアルさんもルシエさんもそうなのだろうと一瞬でわかって
しまった

「いえいえ！今は幸せなので大丈夫ですよ！ね？エリオ君」

「うん！大事な家族なんです！」

まずいことを聞いてしまったと謝ったが、どうやらなんとか大丈夫
だったようだ

違う世界なのだから発言には気をつけなくては

「あゝ」

ルシエさんは何だか期待した顔で俺に尋ねてきた

「その……ルシエさんっていうのは何だか……」

「僕もです。モンディアルさんって呼ばれるのはその……慣れてないというか、物凄く他人行儀な感じで……」

……また名前関係か

高町さんといひこんなフランクでいいのか機動六課

「「なので……」」

二人は自分の考えが一致していることを確信し、俺にそれをぶつけてきた

「私のことはキャロでいいですよダンテさん！」

「あ、じゃあ僕のことでもエリオで！」

ルシエさんに続き、モンディアルさんも言ってきた

「私のこともスバルでいいですよ！」

「それなら私もティアナで、第一ダンテさんの方が年上なんですか
ら」

モンディアルさんとルシエさんに続き、後ろの二人も言ってきた

「だけど・・・」

「ほら・・・俺たちってほぼ初対面ですし！だから・・・」

「ダンテさーん・・・」

ルシエさんは頬を膨らませ不満そうな顔をする、ランスターさんを除く二人も同じ

「ただどランスターさんも心なしか・・・何だか不満そうな表情をしている」

「えつと・・・」

四人の誠意に負けた俺は一人一人指を差しながら

「キャラちゃん」

「はい！」

「エリオ君」

「はい！」

「スバルさん」

「はいはい！」

「ティアナさん」

「はい」

「これでよろしいですか？」

すると、ラン・・・ティアナさんを除く三人はまだ少し納得がいかないようだ

「敬語もなるべく・・・止めて欲しいかなーって」

スバルさんが今度は敬語は止めてほしいと言ってきた

さすがにそこまでは・・・

「何や？食堂の前でみんなして何してるんや？」

目の前の扉が開き、八神さんが顔を出してきた

周りを見渡してみると、いつの間にか食堂へ着いてしまっていたみたいだ

「いえ！何でもありませんよ！ね？ダンテさん！」

「そ……そうだよな！キャロちゃん！あ……」

「ダンテさんそれです！それですよ！」

ついつい口が滑ってタメ口で話してしまった

このような失態を部隊長である八神さんが見逃すハズもなく

「ほほう・・・これは何があったのか食事中じっくり聞く必要があるな」

「や・・・八神さん？」

「とりあえず・・・私たちの席に来ようか？」

「いやだー！助けてくださーい！」

目をキラーンと光らせた八神さんに首根っこを掴まれ、八神さんたち隊長メンバーのいる席まで連行された

あれだけ発言には気をつけるって思ったばかりなのにー！

↳ 部隊長室

食事が終わり、俺は部隊長室に連れてこられた

途中で危険物であるガンホルスターは押収され

シヤマルさんの、食事が終わったら安全の為もう一度医務室へ連れてくるという指示を無視してのことだった

そしてその対象である俺は床で正座中である

楽にしていよいよと言われたが、部隊長室の雰囲気と俺がしたことへの申し訳なさで正座することにした

というか正座しなくちゃいけないような気がした

「さてダンテ君、聞きたいことが沢山あるんやけどその前に……なのはちゃん」

「はぁ……んな!？」

八神さんが高町さんに指示を出したと思ったら、俺の体が桜色の紐というか縄のようなもので縛られ身動きがとれなくなってしまった

「八神さん！一体何を!？」

「何もしなかったらダンテ君逃げるやんか、私もこんな事したくないやけどしょうがなくや」

いくら俺でも全員にマークされてる状態で逃げようなんて思いませ
んって

あ、前科があつたか

「じゃあ改めてダンテ君、あの力は一体何なんや？」

「そう言われましても・・・自分でもよくわからないんです。こっ
ちの世界に来たらいきなり・・・」

俺は八神さん達に詳しい事情を話した

始終色々なことで驚いてはいたが

「八神部隊長、デバイスの検査が終わりました」

「おお、ご苦労やシャーリー」

話が終わるころ、検査の係りの人？が入ってきた

「で、どうやった？」

「結論から申し上げますと・・・」

その人は一瞬ためらい、言葉を放った

「ただのモデルガンですね」

『・・・はっ』

「特に魔力を変換する内部構造も無し、構造どころか中が空っぽな状態です。何度も調べましたが完全におもちゃですよ？」

その言葉に、俺を除く隊長陣が呆気にとられたような声を出した

俺も若干驚いていた

シャムの言っていた通りだ

「ではお返しします、失礼します」

その人は俺にホルスターを返すと部隊長室を出て行ってしまった

「ダンテ君……どういふことや？」

「だからわからないんですって……」

俺の返答に頭を抱える部隊長陣

そんなに珍しいことなのだろうか？

魔法があれば何でも出来そうな気がするけど

「では次は私が、戦術は一体どこで学んだ？」

「どこと聞かれましても・・・」

学ぶどころか、頭に浮かんでくるのだから体が覚えているみたいなのだ

一体どうしたらいいのか

一体縛られているときはどうしたらいいのか

あれ？

この縄を破か・・・ん？

銃を取り・・・って

右手を目の前に構・・・ダメダメ

左手は90度左・・・

『ダンテ君？落ち着いて！落ち着くんや！・・・が！』

『主！！キサマアア！ぐあ・・・！』

『ダンテ君！銃を下ろし・・・！！・・・ぐぐ！』

『なのはあああー！』

・・・

「……くん……テくん」

誰かが呼んでいる

一体誰を？

「ダンテ君！」

気がつけば、高町さんが俺の肩を掴み前後に揺すっていた

「どうしたの！？また何かあったの！？」

「えっと……その……シグナムさん」

「なんだ」

「どこで戦術を学んだって聞きましたよね？」

シグナムさんは頷く

「なんていうか・・・浮かんでくるんです。頭に・・・」

「頭に？」

「はい、だから今も浮かんできました。その・・・」

「あたしたちを、どうすれば殺せるか・・・だろ？」

俺の言葉に続くようにヴィータさんが答える

その言葉に驚いたのか、高町さんやテストタロツサさんは顔を真っ青にしていた

「まだお前は、私たちを敵と見なしているわけか」

「だけど、それも変えなあかん」

俺の考えていたことを理解していたのか、冷静なシグナムさんがヴ
イータさんに続き、その後には八神さんが続いた

「単刀直入に言わせてもらおうで」

八神さんは決心したように言った

「ダンテ君、機動六課に入らへん？」

作者より（前書き）

本編とは全くもって関係ないので飛ばしても大丈夫です

ご注意ください

作者より

皆さんこんにちは作者です

小説が10章へ到達できたということと挨拶に参りました

この作品を見てくださる方

なんとなく覗いてくださった方

ダメだなこの小説と想ってくださいました方

文章力無いなこの小説と想ってくださいました方

本当にありがとうございます

ただ覗いてくださるだけでも本当に嬉しいです

ジャンルが180度違う2つをくっ付け、この後どうなるのか物凄く心配です

最初は投稿の方法を間違え

しかも賛否両論ある作品をくっ付けたので本当にどうなることやら
・
・

感想、質問など遠慮なく書いて大丈夫です

最後に、ここまで書けたのも読んでくださった方、覗いてくださっ
た方々のおかげです

本当にありがとうございます

以上、作者からでした

帰還！シヤムの家へ（前書き）

キャラが崩壊している可能性があります

苦手な方はご注意ください

帰還！シヤムの家へ

「・・・は？」

「だから、機動六課に入らんかつちゅう話やねん」

一体何だ？このデジャヴ

なんとなーく予想はしてたけど、あんなことがあった後に言われるとは思わなかった

俺を除く他のメンバーは冷静な表情に戻っていた

これが数多の戦場を駆け抜けてきた経験から為せる技なのか？

「でも・・・俺は一瞬、ヴィータさんの言った通りあなた達を殺そうとしたんですよ？」

「それは変えていけばいいってゆーたやんか」

「で……ですが」

顔を下に向け俺はうつむいていた

殺そうとしたんだ、殺そうとしてしまったんだと何回も自分の頭の中に声が響く

ふと、俺の肩に手が置かれた

顔を上げてみると、テストロッサさんが優しそうな笑顔を浮かべて俺と同じ目線になるようにしゃがんでいた

「大丈夫だよダンテ君。私たちはそんなに弱くない」

「そうだよ、結構強いんだから」

テストロッサさんに続いて高町さんが答える

「それにね、心配なんだよ。君のことが」

一呼吸おいて、高町さんの後に再びテストタロッサさんがそう言う

「私だけじゃないよ？シグナムもヴィータもはやても、そしてなのはもね」

最後にテストタロッサさんが高町さんに顔を向けると、高町さんは笑顔で返した

「それに、フォワードのみんなも。ダンテ君があんなことになっちゃったのには驚いたけど、戦い方を見た四人。キャラとエリオは大はしゃぎだったんだ」

「スバルもね。それとティアナも、あの正確な射撃はどこで訓練したんだろって驚いてた」

そんなに大したものではないのだけれど・・・

誉められるとどうも照れてしまうな……

今の二人の言葉から察すると、キャロちゃんとエリオ君はテストロツサさんが、スバルさんとティアナさんは高町さんが教えてるってわけか？

「ヴィータもな、すごいダンテ君のこと心配してたんやで？あんなヴィータ初めて見たなあ」

「な……！は、はやて！それは言わない約束だろ！」

ヴィータさんが顔を真っ赤にして八神さんに掛かっている

「シグナムも、冷静なように見えて本当はダンテ君のこと凄い気にかけてたんだよ？」

「お……おいテストロツサ！わ……私はただ、戦えなかったのが不満なだけだ！」

テストロツサさんが俺に耳打ちするような体勢で話し掛けるが、声は普通に聞こえるように喋った

もちろんそれはシグナムさんにも聞こえるわけで、シグナムさんは顔を少し赤くしながら俺から目を反らした

「・・・と、話が脱線してもうたな」

八神さんがそう言い放ち、俺たちは雑談を止め、八神さんの話に耳を傾けた

「で、どうや？入らへんか？」

・・・正直に言って、俺はあまり気が進まない

恐いっていうのもあるけど、それより何より八神さんたちに迷惑をかけたくない

シヤムにも・・・迷惑をかけたくないのだ

「ダンテ君・・・やっぱり優しいよ」

黙り込んで考えてる俺に、高町さんはそう声を掛けてきた

「たぶんダンテ君・・・私たちに迷惑をかけたくないか思ってるでしょ」

「そ、それは・・・」

凶星だった

反論できない俺を見て、確信したかのように話を続ける

「ダンテ君のいいところは、その優しさだよ。その優しい心があれば沢山の人を救える・・・どうかな？機動六課に入って、私たちと

一緒に沢山の人を救ってみない？」

「……私が言いたかったのはまさしく、なのはちゃんの言ったことや。どうや？ 私たちと一緒に……」

それは、八神さんが高町さんに続いて話している途中だった

次の瞬間

バキバキと部隊長室の扉が音を立てたかと思つたら、扉がこれまたもの凄い勢いでこちらに飛んできた

後数センチずれていたら、俺は扉ごとぶっ飛んでいた

あのシグナムさんでさえ、目を点にして驚いている

「……はやてちゃん」

入り口に居たのは、確か……

「シ・・・シャルヤないか。そ・・・そうや！今連れて行くことしてたんやで!？」

「私言つたよね？安全の為に食事が終わったらすぐ医務室に連れて来てって・・・」

「そうだ、医務室のシャルヤさん・・・シャルヤ先生だったかな？」

「それにしても、いいところに入ってきたな」

「それに・・・何でバンドなんかしてるの?・・・なのはちゃん」

「「・・・これは、えっと・・・あはは」

なるほど、この帯みたいなの紐みたいなのはバンドって言うのか。
ほうほう、勉強になった

「・・・はやてちゃん」

「お・・・落ち着いてな？な？何事も話し合いが大事やで？」

「おかしいと思って来てみたら、やっぱり「ういっことだったのね」？」

「シ・・・シヤマルさん？」

「問答・・・無用！」

「「ぎゃー！助けてー！」」

うーん、何だか喉が渴いたなあ

食堂に行ってみよ

「テストロッサさん」

「な・・・何かな？」

「食堂に水ってあります？タダですか？」

「応確認しておく」

「こっちのお金持っていないしなあ・・・」

「う・・・うん。あるし、タダだよ？」

「あ、そうですか。ありがとうございます？」

「そう言っただけ俺は食堂へと歩き出す」

「お礼の言葉は大事だからね」

「・・・ダンテ君」

「はい？」

「たくましいね・・・」

「いえいえ、そんなことないですよ？」

俺はこの紐・・・バンド？を砕き、食堂へと向かった

案外緩いなこれ

「それじゃあフェイトちゃん、お願いや」

「うん、まかせて」

あの後、食堂から戻ったあとシャル先生に自分は大丈夫だということ伝え、場を抑えた俺は帰ろうとしたところ八神さんに呼び止められた

八神さんによると、今日のところは帰してあげるけど入る入らないについてはじっくりとな・・・らしい

それに俺は、下手をすれば犯罪者のようなものらしい

何でも、質量兵器がうんたらかんたら

難しかったからよくわからなかったけど、気をつけるように・・・のことだ

「よ・・・よろしくお願いします・・・」

「うん、よろしく」

話を戻そう

呼び止められた俺は、八神さんからテストロッサさんが送ってくれるという提案を受けた

さすがに忙しい身なのにそこまではと断ったが、テストロッサさんの強い希望により送迎が決まってしまった

それも車

そしてまたスポーツカー……

（車内）

「なのはは本当に無茶するから、目が離せないんだよね」

「あー……」

車内、てっきり会話が無くなると思っていたけど、高町さんの時と同じように気さくに話し掛けてきてくれた

これが執務官の成せる技なのか・・・

語学も達者でおられる

「な・・・仲がいいんですねテストロッサさん」

俺が相づちを返すと

「むう・・・」

と少し不満そうな顔をしてきた

ま・・・まさか、何か失礼なことを言ってしまったのだろうか

「その・・・テストロッサさんじゃなくてフェイトでいいよっ..」

「え？あ、いや・・・」

「なんだか堅苦しい感じがして・・・」

また・・・

こんなフランクでいいのか機動ろ

「ダメ・・・かな？」

「いや・・・ダメというかですね」

「ダメ・・・かな・・・」

テストロッサさんは少し涙目になりながらそう呟いた

こちらからでも若干それがわかる

「いやほら、テストロッサさんほどのお方を名前で呼ぶのは・・・」

「ダ……メ……かなあ……」

ダ……ダメだ

いや、名前を呼ぶのがダメなんじゃなくて、テストロッサさんは泣く一歩手前だ

こんな美人さんを泣かせるなんて俺はどうかしてる

「テ……テストロッサさん、あの」

「……いや」

「はい？」

「……フエイトって呼んでくれるまで話さない」

本格的にダメだこりゃ

完全に子供化してしまっている

一体どうすれば・・・

いや、名前呼べばいいんだろっけども・・・

「テ・・・テストロッサさん」

「・・・」

「テストロッ・・・サ・・・」

「・・・」

「・・・フ」

「・・・？」

「フ・・・フエ」

「うんー！」

「フェ・・・フェイ・・・」

「うんうんー！」

「フェイ・・・あ、ここです！シヤムの家です！」

シヤムの家に着き、名前のことはうやむやにしたままテストロッサさんは駐車場に車を止めた

「そ、それでは！ありがとうございます・・・」

テストロッサさんにお礼を言い、俺はシヤムのマンションへ入ろうと車のドアを開け外に出ようとしたが

「待った、私に同じ手は通じないよ」

テストロッサさんに右手を捕まれ車の中に引きずり込まれてしまった

運悪く、その時左手でドアを掴んでいたため閉まってしまうい、おまけに鍵を掛けられてしまった

「い……一体何を？」

「なのと同じ手は私には通じないってこと」

高町さん！何言っちゃってんですか！

ということは、高町さんとテストロッサさんは仲良し……ってこと？

「ちゅ……言ってみて？」

「いや、言ってみてと言われましても・・・」

すると、テストロッサさんはまた目に涙を浮かべ泣きそうな顔をしていた

といつかこのままでは本当に泣いてしまう

さすがに罪悪感が生まれてきてしまったので

「フェイ・・・フェイ」

「うんうん!」

「フェイ・・・トさん!よし、言い切りました!」

そう言いながらフェイトさんに顔を向けると、まだ少し不満そうだ

「できれば……』さん』も無いほうがいいかな？」

「そこまでは今回は勘弁してください」

まだ不満そうな顔をしていたが今回はこれで勘弁してもらった

それにしても機動六課っていう組織は本当にわからない

堅苦しい感じじゃなくて、何だか暖かみのあるような……

それが良いところ……でもあるのかな

くシャムの部屋く

「ただいま」

「おかえりダン！大丈夫！？痛いところない！？」

「大丈夫大丈夫、大丈夫だよ」

リビングに入ると、ソファーに座っていたシャムが駆け寄ってきた

なかなか帰ってこない俺のことを心底心配してくれたようだ

「まさか・・・逮捕とか？」

「いやいや、そんな話じゃなかったよ？」

どうやらシャムは、俺が逮捕されるんじゃないかと思っていたみたいだ

まあ、それらしきことをしたから無理はないんだけどね

それでも逮捕されなかったのはたぶん・・・

「……目をつけられたみたい」

「八神部隊長に？」

「うん、機動六課に入らないかって……」

「ダメ!!」

少しの間沈黙が支配した

まさかシャムがこんな大きな声を出すとは思わなかったからだ

シャム自身も少し驚いているようだ

俺はというと……もう声が出なかった

明らかな拒否反応

「あ……ごめんね」

「いや・・・いいんだ」

謝ってくるシャムに俺は何も言えなかった

また少しの間沈黙が支配したあと、シャムが口を開いた

「私にはね、妹がいたの」

シャムはソファーに戻り、腰掛けながら言った

「私たち二人は、管理局で働いてたんだ」

シャムは懐かしい思い出を思い出すかのように話し続けた

「私たち二人は少し有名だった。戦いの場においては最高のコンビだったの」

「あれ？でもシヤムは・・・」

「うん、今は違う。それにもちょっと理由があるんだ」

シヤムは立ち上がると、リビングの片隅に置いてあったラックから一枚の写真を持ってきた

「・・・廃墟？」

「うん、一階のみ。というより、少し大きいプレハブみたいな感じ」

写真に写っていたのは崩れた建物

大きさをからしてシヤムの言った通りだ

「何かの弾みに撮れちゃったんだね。私のデバイス、現場検証の為にカメラ機能ついてるから」

「えっと・・・これと妹さんに何の関係が？」

「妹は・・・この建物の中で死んだの」

とてもスラスラと出てきた言葉だった

でもその声は、どこか無理しているような感じで・・・

なんとも言えなかった

「いや、行方不明って言った方がいいかな」

「・・・遺体か？」

「うん、見つからなかった。他の人も首を傾げてたよ・・・」

シヤムがまだこの話を話せるのは、おそらくまだ生きているかもしれないという希望があるからだろう

でも、もしかしたらもう生きていないかもしれない

その狭間で闘っているのだ

「私たちにとっては簡単な任務だったの。怪しいプレハブがあるから調べに行っただけ。ただそれだけだった、でも……」

シヤムは口ごもるような口調になったが、話を続けた

「妹が調査の為にプレハブに入ってから少し経ったら、プレハブが爆発したの……」

「それじゃあ……その爆発で……」

「うん、誰も予想できなかった……誰も……」

シヤムは悔しそうに語る

何も出来なかった自分に腹が立つのだろう

妹を助けることが出来なかった苛立ちに

「あの子なら・・・大丈夫だと思ってた。でも、あの子も人間。完璧ではない」

たしかにそうだ完璧な人間なんていない

いくら強い人だって、欠点はある

「それが原因で・・・私は戦場から去った。しばらく立ち直れなかったなあ・・・」

シヤムは天井を見上げながらそう言う

「そして、何とか立ち直った時に、私の過去の成績を聞いて機動六課に入らないかって話が来たの」

「それで機動六課に・・・」

「うん。たとえ戦わなくても出来ることがあるって」

そうか・・・管理局員と言ってもまだ19歳

シヨックなことはシヨックだし、それが身内に関わることだとすれば尚更だ

「そうして機動六課で働き出したときに、ダンに会った」

シヤムは、次は俺を見ながら話し続ける

「一人で突っ走るダンを見てたら、何だか妹を思い出しちゃって・・・」

「・

「それで・・・引き取ることにしたと」

「・・・うん」

・・・まさか、そんな事情があったなんて・・・

いつも笑顔でいるシャムにそんなことが・・・

「だから・・・ダンには同じ目に遭ってほしくないの」

シャムは俺の手を握り、はっきりと俺に言った

「お願い、機動六課に入ることはちゃんと考えて。軽い気持ちで決めないで」

シヤムは、俺の目をしっかりと見てそう言い放った

この言葉は、俺のことを心配してくれてるからこそだ

「大丈夫だよシヤム」

「え？」

俺も、シヤムの目を見ながらはつきり答える

「今は・・・それは考えてないかな、まあ八神さんたちの勧誘もあるけど・・・おそらく・・・しばらくはね。俺恐がりだし、シヤムの世話もしなくちゃいけないしね」

「それじゃあ私が妹みたいじゃん」

そう言って、俺たちは笑いあった

笑いが収まると、シヤムはまた俺の目を見ながら言う

「もし・・・入る時になったら自分で決めるんだよ。ダンの人生なんだし」

「ああ、決めるときは自分で決める」

「よし！それでこそダンだ！それじゃ、この話はおしまい！」

そう言ってシャムは俺から離れてソファーに座った

「ううとこるも、本当に尊敬する」

「どっするっ！はん食べるっ！」

「いや、もう食べてきたしシャワーも浴びたから今日はもう寝るよ。疲れたし」

「そっかあ、じゃあ私も一緒に寝ようかな」

「な・・・何言ってるのさ！」

シヤムみたいな綺麗な人が隣にいたら緊張して全然眠れない

ましてや、顔もボディも完璧な人だったら尚更

い、一体どうすれば！

「冗談だよ。じゃ、おやすみ」

・・・どうやら冗談だったようだ

「・・・はあ」

それにしても、機動六課のことは本当にちゃんと考えなくちゃなあ

シヤムの期待を裏切らない為にも

そう自分に言い聞かせながら、俺は静かに目を閉じた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9096y/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS～二次創作～

2012年1月6日09時46分発行